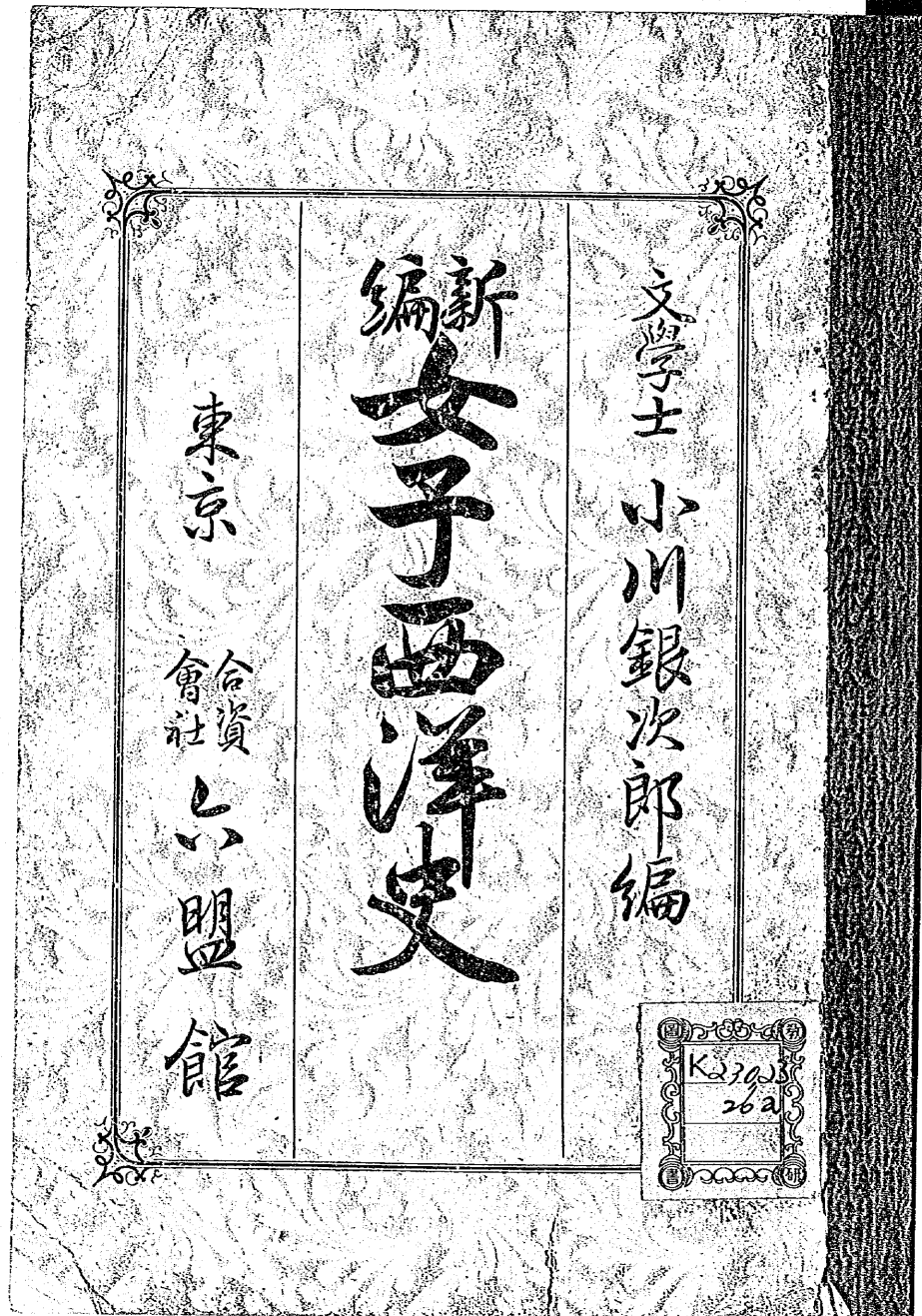


K230.23

26a



文學士 小川銀次郎 編

新編 女子西洋史

全

明治
45. 3. 15
丙寅

東京
合資
會社
六
盟
館

例言

一 本書は高等女學校及び同程度の女學校の歴史科外國歴史の教科書に充つるの目的を以て編纂せり。

一 本書の細目は明治四十四年文部省訓令第十二號の高等女學校教授要目により、その分量は半學年間每週二時の課程を以て標準とせり。

一 事實の本邦または東洋史に專屬すべきものは、成るべく國史または東洋史に譲り、本書にはこれを略述して、唯事實の連絡を示すのみに止めたり。

一 清國以外の外國固有名詞は、常用のものゝ外は成るべく假名を用ゐ、その發音は率ね、文部省の發表せる外國地名人名唱

- へ方書き方表によれり。
- 一 書中の年號は西洋紀元を用ゐ、國史・東洋史對照の便を計り、欄外に皇紀及び支那の時代等を記入したり。
 - 一 挿畫は讀者の記憶を助け、事實の説明を補ふに必要なを以て、所々に適宜これを挿入せり。
 - 一 系圖は各要處に挿入して、事實の關係を明瞭ならしめんとを つとめたり。
 - 一 地圖は要所に挿入して、參照に便にせり。
 - 一 卷末に年表及び索引を附して、讀者の記憶研究に便にせり。
- 明治四十四年十二月

編者識

新編女子西洋史目次

第一篇 上古期

第一章 東方諸國の盛衰

えじふと ふえにきあへぶらい あつし
りあの一統 はびろにあの隆盛 べるしあ
の一統

第二章 希臘の文物

希臘の勃興 美術文學 哲學科學 まげど
にあ アレクサンドル大王 あれくさんど
りあ 領土の分裂

第三章 羅馬の文物

羅馬の隆運 羅馬外征の結果 學術 キリ
スト教 帝國の衰亡

第二篇 中古期	一二
第一章 サラケン文化并に歐洲諸國の建國	一二
イスラム教起る 學術技藝 ふうらんく國	
獨逸佛蘭西の建國 英吉利の建國 露西亞	
第二章 羅馬法王と十字軍	一七
羅馬法王の勢力 義騎 十字軍 法王と蒙古	
第三篇 近古期	二〇
第一章 文運の復興 社會の變遷	二〇
法王權の失墜 古文の研究 印刷の發明	
美術 常備軍の設置 火器の發明	
第二章 新陸地發見	二三
土耳其の勃興 亞弗利加回航 新大陸發見	
西班牙の植民 世界一週	
第三章 宗教改革	二七

宗教改革の希圖 カロロ五世の政策 佛王の反對 新教起る 新教の蔓延 カルビン	
の新教 舊教の對抗 イエスイタ教社 宗教媾和 カロロ五世の讓位 フィリポ二世の方針 和蘭の獨立宣言 英國の國教制定 英國の新教援助 獨逸三十年戰	
第四章 東洋及び南洋に於ける葡萄牙西班牙和蘭英吉利	三六
葡萄牙の植民貿易 西班牙の植民貿易 和蘭の植民貿易 英吉利の航海貿易 英蘭兩國の競爭 和蘭の勢衰ふ	
第五章 英佛植民狀況 ルイス十四世	三九
英國の新大陸植民 佛國の植民 佛王ルイス十四世 西班牙相續問題 英國の優勢	

第六章 ペテロ大帝……………四三

露西亞の東進 ペテロ大帝 大帝の西方經營 北方戰爭 内治の整備 カタリナ一世

第七章 フレデリキ大王、英佛露の植民……………四七

普魯西 埃國相續問題 戰爭 戦後の形勢 七年戰爭の源因 戰爭 英佛植民地戰 媾和 戰爭の結果 ぼーランド分割 ぼーランドの滅亡 帝國復興策

第八章 亞米利加合衆國の獨立……………五三

獨立の源因 戰闘 媾和 合衆共和の憲法 マリア

第九章 十八世紀歐洲の情勢……………五八

哲學 科學 文學 美術 政治上の問題 自由主義 專制主義 革新文學 富國策

第四篇 近古期……………六五

第一章 佛國大革命……………六五

大革命の源因 革命の動機 大改革決定 王權停止 王の弑虐 理事政府起る

第二章 ナポレオンの偉業……………六八

和蘭滅亡 和蘭及びえじぶと遠征 頭等統領 皇帝 あうすてるりつつの戰 とらふるるがるの海戰 大陸同盟 普國王后ルイサ 英國の反抗 びれねー半島征服 埃國征伐 ナポレオンの全盛

第三章 ナポレオンの衰亡、平和克復……………七三

露國征伐 ナポレオンの流竄 ちいーん會議 ナポレオンの再起

第四章 亞米利加諸國及び希臘の獨立……………七七

第五章

神聖同盟 ぶらじの獨立 西班牙植民地の獨立 希臘の獨立
佛國の政變とナポレオン三世……………八〇

第六章

七月革命 二月革命 共和政治成る ナポレオンの出世 ナポレオン三世の策 東歐の事變 くりむの戰 ばりー會議 ナイチンゲール 佛帝の偉業
伊太利の統一……………八六

第七章

伊太利の自由運動 さるぢにあの希圖 そるふえりの戰 媾和 さるぢにあの強大 伊太利の建國
獨逸の一統……………八九
普魯西の企圖 しうれすういひ問題 普埃の衝突 さどほの戰 獨逸の改造 普佛の葛藤 佛帝の降服 べるさいゆ條約 獨逸

第八章

露土戰爭……………九五
普佛戰爭の形勢 戰爭の原因 戰闘 べるりん條約

第九章

西洋諸國の形勢……………九八
三國同盟 二國聯合 英國の位置 土耳其 希臘の役 露國の改革 諾威の獨立 米國の發展

第十章

亞細亞亞弗利加大洋洲に於ける歐米諸國の經營……………一〇三
露西亞の南進 英國の印度經略 中央亞細亞に於ける英露交渉 西清に於ける英露 東南清に於ける英露 滿洲についての英露 日露の衝突 えじぶとと英國 亞弗利加の

經營 英國の南弗經營 大洋洲に於ける英
國 英佛協約 獨逸の經營 米國のはわい
合併 米西戦争 米國の政策

第十一章 最近文明の進歩……………一二三

文學史學 哲學 科學 蒸氣機關 汽車汽
船 電氣の應用 武器 經濟の發達 宗教
の情況 社會の情況 共同博愛事業 萬國
平和會議

系圖

フランク王家系圖……………	一五
カロロ五世に關する系圖……………	二九
チウドル朝系圖……………	三三
西班牙王位相續に關する系圖……………	四一
露國帝室の系圖……………	四七

地圖

スチウルト朝系圖……………	六二
ルイス十四世後佛國王家の系圖……………	七六
古代東方諸國圖……………	三
アレクサンドル領の圖……………	七
羅馬版圖の圖……………	一一
さらけん國の圖……………	一二
宗教改革時代の歐洲圖……………	二八
一七六三年の歐洲圖……………	五二
亞米利加に於ける植民地……………	四二
ぼーらんど分割の圖……………	五四
獨立時代の亞米利加合衆國……………	五五
ナポレオン全盛時代の歐洲圖……………	七〇
一八一五年の歐洲圖……………	七五

一八七八年の歐洲圖……………九六

目次終

新編女子西洋史

文學士 小川銀次郎 編

第一篇 上古期

第一章 東方諸國の盛衰

えじふと 亞弗利加洲の東北端は、る河下流の沃土に
えじふと國あり。西紀前二七〇〇年頃已に開明を致し、天
文・數學・醫術等大に發達し、西紀前一六五〇年頃國運最も隆
昌なりき。かのは、る河邊に屹立せる金字塔は國王の墓
丘にして、以て當時の文化を想見するに足る。
ふえはきあ えじふと隆盛の頃、地中海の東岸にふえはきあ

支那の開明
と殆ど時を
同うす

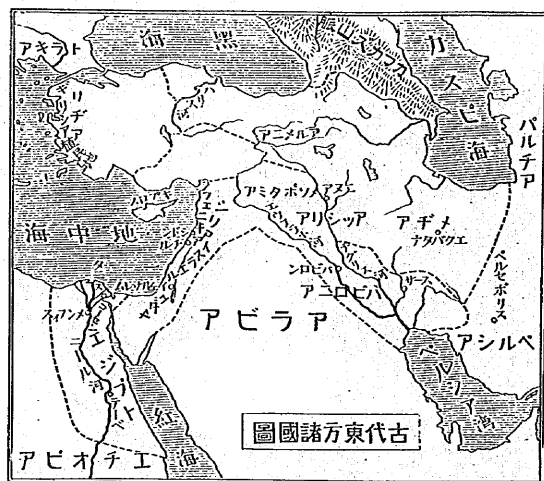
金字塔の高
五、六十丈に達
するあり、千
噸以上の石を
あり用ゐたる

モ一ゼ、し
ない山麓に
十誠を説け
り

[illegible]

人住し船を作りてえじふとに往來貿易し、また地中海、大西洋を航行して盛に植民貿易を營めり。ふえはきあに於て發明せる音標文字は後世西洋諸國文字の基をなせり。

へぶらい ふえにきあの東南ばれずちなにはへぶらい人
起り、一神教を奉じて附近の多神教徒と争ひけるが、内訌に
よりにて遂にいすらえるゆだやの兩國に分裂せり。(西紀前九
五三年)
あしりあの一統 ばれずちなの東方えうふらと、ちぐり
ず兩河の流域にも、太古かるてあ等の文明國早く起りける
が、その後ち、ちぐりず河の上流に國せるあしりあ勢を得て、
漸くかるてあ等を併呑し、遂にはふえにきあいすらえるを滅

[illegible]

前第七世紀の中頃、はじめ
て世界統一の大業を成
せり。然るに統御の法
宜しきを得ざりしかば、
幾もなくして遂に**ばび
ろにあめちあ**兩國に滅
ぼされたり。(西紀前六
百年)
ばびろにあの隆盛
こゝに於て舊王國皆獨
立せしが、就中**ばびろに**
あは商業を盛にし、工藝

べるしあの一統 然るに西紀前第六世紀の中頃、べるしあ國起り、漸次これ等の諸國を併呑し、更に東方ばくとりあ地方をも平定し、西は地中海より東は印度河邊に至る領土を一統せり。然るにその小亞細亞を併呑するや、その西方に崛起せる希臘と衝突を起しき。

第二章 希臘の文物

希臘の勃興 希臘は山水秀麗の地にありて、東方諸國の文物を學び、國內の各邦互に相競争研鑽して、夙に開明を致せり。希臘諸邦中、あてねずばるたの二邦は最も著しく、前者は自由を愛し、美術工藝をすゝめ、後者は武勇を尙ふ。べるしあか小亞細亞を領するや、あてねは希臘植民地の叛亂

を援助せしかば、遂にべるしあと大衝突を起し、西紀前第五



刻彫の内堂殿シノテルバ

世期の上半期には大戦數回に及びしが、希臘の諸邦は毎によく一致して敵を破り、遂にべるしあをして希臘を窺ふ能はざらしめたり。

美術文學 希臘が大勝を得る

や、あてね最も隆盛を致し、あてねの文物は燦然として光彩を放てり。當時ペリクレス(西紀前四二九年歿)の保護によりて成れるばるてのん

の神殿は壯麗を極め、フィディアスの彫刻は高雅にて精巧をつ

くせり。文學には各種の詩賦、戯曲の類發達し、歴史もヘロドトス出でて名をあらはせり。

哲學科學

哲學科學また希臘に起り、大聖ソクラテス（西

汝自身を知れとはソクラテスの格言なり

皇紀二六二年
蘇ドの世



ステラクソ

前三九)はあてぬに出て、孔子と並べ稱せらる。アリストテレスは論理

學、政治學を講究し、また生物、礦物諸學を研究せり、その他ヒッポクラテス

の醫學、エウクリデスの幾何學等も出てたり。後世の學術にして端を希臘に發せるもの甚だ多し。

まけどにあ、かく希臘の文物は盛なりしが、その國內は各邦互に相嫉視し、相争ひ、國勢爲めに振はず、遂に北方に起れるまけどにあに征服せられたり。



アレクサンドル大王

アレクサンドル大王 まけどにあ王アレクサンドル大王は不

世出の雄略あり、精銳の兵を率ゐて、

皆勝ち、西紀前三三一年遂にべる

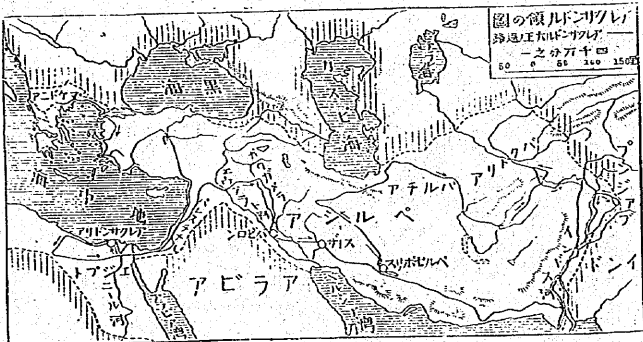
しあ國を滅ぼして、己れ代りてその相續者と稱し、

ばびろんに都して廣大の領土を統一せり。

大王は東西の文明人種を融合して強

固なる王國たらしめんとせしが、

經營未だ成らずして歿せり。(西紀前三紀)



皇紀三三〇年

皇紀三三〇年

上古期 希臘の文物

年二三

あれくさん
どりあの圖
書館有名な

あれくさんどりあ 大王の建立せしにゝる河口のあれくさんどりあは當時最も繁榮殷富を極め希臘の學者も多くのこゝに移り來りしかば、あれくさんどりあはまた學術の中心となりぬ。

領土の分裂 大王の歿後大王國は四分五裂せしが、後に至り、東部は殆ど安息に併せられ、西部は率ね羅馬の領地となりぬ。

第三章 羅馬の文物

羅馬の隆運 羅馬はもとちべる河畔に起れる小國なり。國內には貴族平民の二階級ありて互に相争ひけるが、外敵

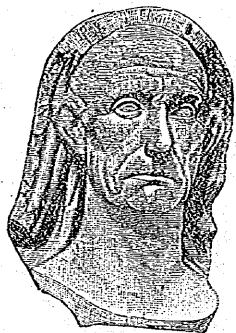
皇紀三八一年
支那戰國の世

皇紀五二八年
漢武帝時代

に對しては毎に協同一致してこれと戦ひ、漸次伊太利半島を併有して、西紀前二八〇年頃より約百五十年間には、東方に盛なるまげどに、あ、亞弗利加の北岸に雄飛せるかるなでを滅ぼし、西班牙半島を併せて一大雄國となりぬ。

羅馬外征の結果

かくて羅馬人は暴富を致し、希臘の文物を輸入し、一時隆昌の觀ありしが、奢侈の風從ひて起り、市民財を失ひ、一國の元氣忽ち衰へたり。ここに於て羅馬に



ルザイケ

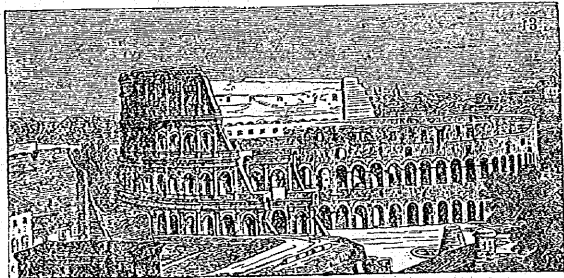
は富者黨、貧者黨起りて互に相争ひ、羅馬は一時貧者黨の首領ケーザルの有に歸し、ついでその養嗣子オクタヴィアヌスは天下を平定し、西紀前二七年アウ

皇紀六三四年
皇武帝時代

グスツスの尊號を取りて羅馬に君臨し、西は大西洋より東

はえうふらと河邊に至るの領土を一統せり。

學術　羅馬の文物はこの頃に至りて大に發達し、廣大壯麗なる大理石の諸建築物建立せられ、その演技場の如きは裕に二十萬人の觀客を容るべきものありしといふ。ケーザルのがりあ戦争記、ホラチウスの詩文等、らてん文學も多く世に出て、第二世紀帝アウレリウス・アントニウスの時は、文學、技藝大に進み、支那との交通も開け、羅馬

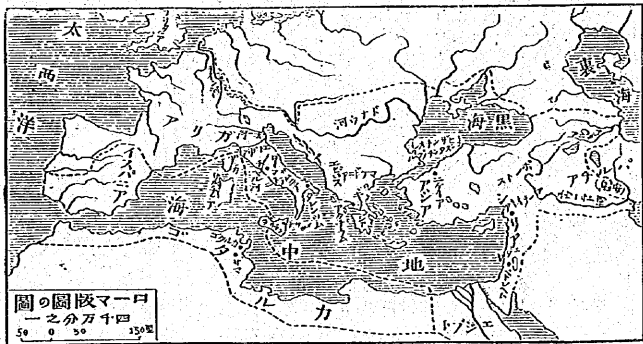


コロッセウムの現狀

凱旋門も建てられたり

の黄金時代と稱せらる。第六世紀にユスチニアヌス大帝出て、羅馬古代の法典を取捨して羅馬法典を編成せり。

キリスト教　アウグスツスの世イエスキリスト、ゆだやに生れ、三十歳の頃、一神教の理を説きて舊來の教旨を攻撃し、遂に十字架上に磔殺せられたり。使徒セントパウロ、羅馬にキリスト教を説きてより、その教漸く廣まり、遂に紀元三二三年コンスタンチヌス大帝によりて、羅馬



ローマ帝國の圖
一之分万四千
50 0 50 250哩

匈奴王アチ
ラ歐洲の中
央を領した
ることあり

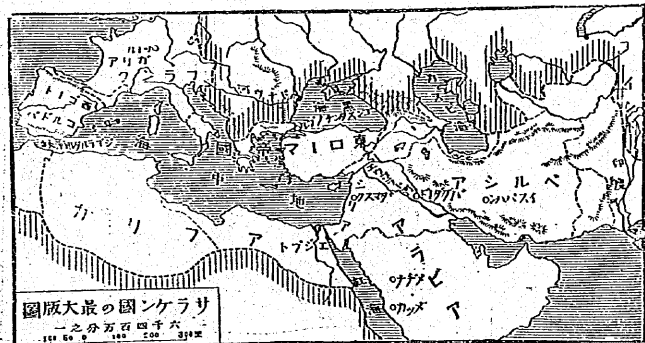
皇紀一三六
年 東晉の末世

の國教と定められたり。
帝國の衰亡 大帝都をこんずた
んちのふるに奠め、大に改新の政を
施き、外べるしやと對抗せしが、大帝
の歿後、國は東西に分裂し、勢威遂に
揚らず、西羅馬の領地は匈奴に追は
れて西走せる獨逸民族に占領せら
れ、四七六年遂に滅びぬ。

第二篇 中古期

第一章 さらけんの文化

歐洲諸國の建國



皇紀一三八二
年 推古天皇の
初唐高祖時代

皇紀一三〇一
年 舒明天皇の
初唐太宗時代

あはびあ文
字アルコー
ルは當時文
明の遺蹟な
り。

あはびあ文
字アルコー
ルは當時文
明の遺蹟な
り。

イスラム教起る 羅馬帝國衰耗の後、ムハメッドあら

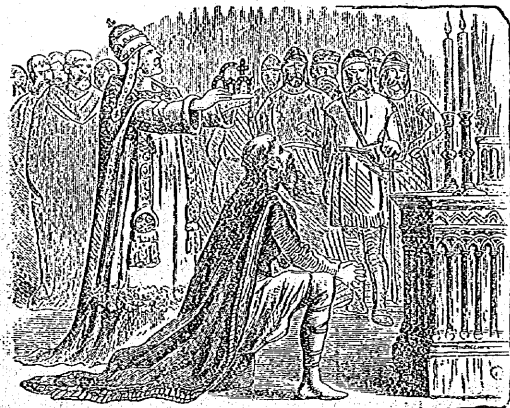
びあめっかに出て、ゆだや教及びキリスト教を參酌して、六
二二年イスラム教を開けり、回教これなり。教徒は武力に
より教法を弘め、領土を擴め、六四一年にはべるしあを滅ぼ
し、更に西して阿弗利加の北部を席卷してがりあに亘れる
領土を有せり。この大國を稱してさらけん國といふ。

學術・技藝

さらけんは第八世紀の中頃東西に分裂せし
が、東方はぐだど領には文學・科學盛に研究せられ、西方こ
るどば領には華麗の建築物建てられたり。加之、さらけん
人は農業を興し、工業をすゝめ、その商業は印度及び支那に
達したりき。

ふらんく國 イスラム教徒のがりあに入るや、がりあにふ

らんく國あり。第五世紀の末フロドウィヒの建國に係る。



冠戴の帝大ロロカ

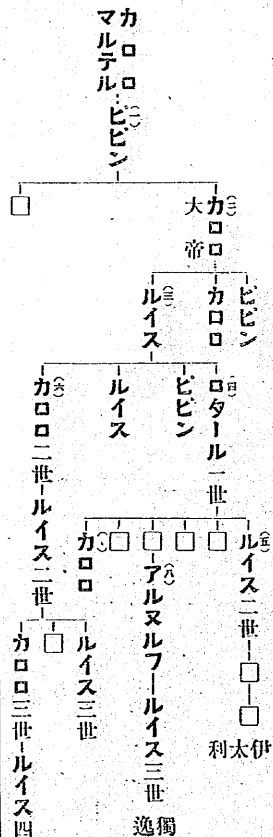
第八世紀の初め、ふらんくの相カロロマルテルは歐洲に創めて封建制度を立て、よくさげんの侵入を防ぎて功あり。その子ピピン遂にふらんくの王位に即き、その子カロロの時は大に領土を擴げ、八〇〇年羅馬法王の加冠によりて羅馬皇帝と稱し、あへんに都す。大に學術を獎勵し、農工を保護せり。世これ

皇紀一四六〇年
桓武天皇の
朝
唐德宗時代

をカロロ大帝といふ。

獨逸佛蘭西の建國 大帝の歿後、その子ルイス暗愚なり。子孫領土を爭ひ紛擾續出し、遂に八八七年アルヌルフ東ふ

皇紀一五四七
光孝天皇の
朝
唐の末世



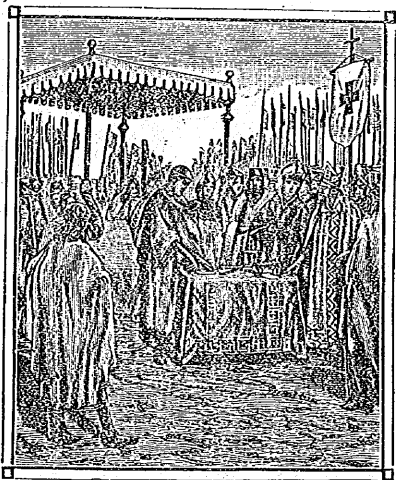
らんくを定めて獨逸國の基を開けり。その後ち帝統絶え、

國內の侯伯教正は帝王を選舉せしが、さくそはあ公オト一世立つに及び、また法王の加冠により、九六二年神聖羅馬

皇紀一六二三年
村上天皇の
朝
宋太祖時代

皇帝と稱し、獨逸に君臨することゝなりぬ。西ふらんくはなほ紛争を重ね、九八七年に至り、フリーゴ王となり、佛蘭西の基を定めたり。

英吉利の建國　ぶりねにあ島の南部には、第五世紀にア



名署法憲のンアォジ

ングル・サクソン等の民族移住して許多の王國を建てしが、八二七年エグベルトこれを一統して英國の基業を開けり。その後ち王ジョアン、暴政を施ししかば、國內の貴

皇紀一四八七年
淳和天皇の
御年中世

皇紀一八七五年
順徳天皇の
南宋寧宗時代

皇紀一五二三年
清和天皇の
唐の末世

族・教正は王に迫り、一二一五年その立案せる憲法に署名せしめ、人民の生命財産の安全を保障せしめたり。その後ちまた五十年を経て、ヘンリー三世の時、貴族教正はまた王に迫りて代議院を開かしめたり。これ世界に立憲政治あるの始とす。

露西亞　のるまんの人ルリクといふもの、八六二年のぶごろどに據り、スラブ人を征服して露西亞の基を定めたり。

第二章　羅馬法王と十字軍

羅馬法王の勢力　キリスト教はもと羅馬皇帝の保護によりて漸く隆盛を致ししが、皇帝の勢衰ふるに及び、羅馬の教會は盛に蠻民を教化し、子弟を教育し、また貧民を救済せ

教正の任免
は法王の權
内にありと
いへり

皇紀一七三七
年白河天皇の
朝
宋神宗時代

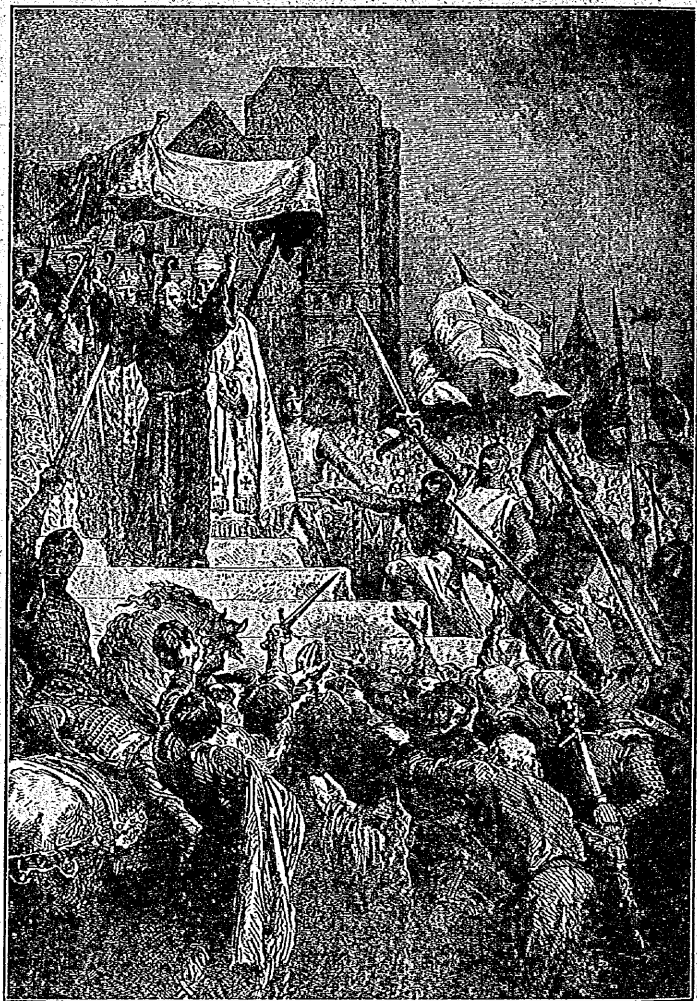


世七オリゴレグ

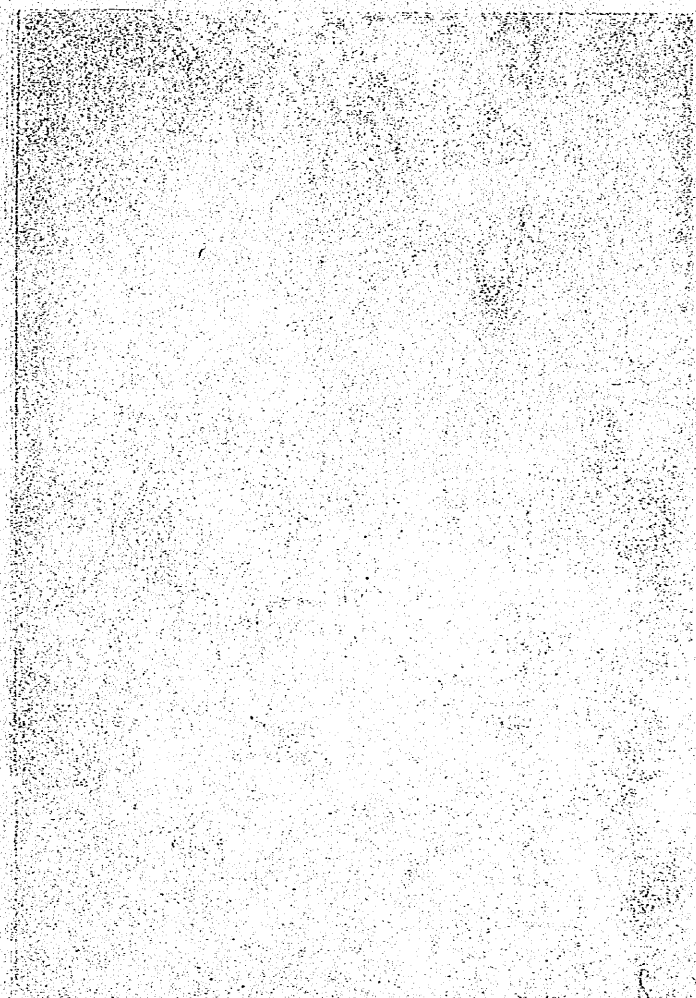
しかば、教會の勢力漸く重きを加へぬ。法王グレゴリオ七世豪邁にして雄略あり、法王の位置を列國の君主の上に置き、以て大に人民を教化し、爭鬭殺伐の跡を絶たしめんことを期す。乃ちまづ教會内の風儀を矯正し、弊風を一新せんとし、遂に皇帝ヘンリー四世と争を生じ、一〇七七年、遂に皇帝をして法王に服従すべきを誓はしめたり。ここに於て法王は政治に、社會に、學術に、その偉大の勢力を振ひ、命に悖ふものあれば破門を宣言して起つ能はざらしめたり。

義騎 法王權隆盛の時代には、濟生救民の諸團體起りしが、就中、義騎は信義を尙び武勇を重んじ、義俠を旨とし、或は

(圖く説を要必の征遠ラペ) 因源の軍字十



(註) 聖地牙哥の戦い



義 騎

婦人の困厄を救ひ、或は貧弱無辜の民を救ひ、世を益すること多く、西洋婦人の位地は實にこれによりて高められたるなり。

十字軍 この頃キリスト教徒はい

えるされむの靈場を巡拜し、土耳古人に虐殺せらるるもの甚だ多し。法王くれるもんに教徒を會し、聖地恢復の軍を起さしむ。衆感激して神意と稱し、赤十字の徽章を附して従軍せり。これを十字軍といふ。一〇九六年第一回の大十字軍佛蘭西を發して、いえるされむを占領せしが、その後ち、獨帝佛王・英王等、法王の命に應じて、或は王國應援に、或は領土恢復に、前後七回の大遠征軍を起ししが、皆失敗に歸し、

皇紀一七五六
年 堀河天皇の
御宇時代

皇紀一九三〇
年 龜山天皇の
朝 終末世
南宋の末世

マルコボロ

戦争は一二七〇年に至るも未だ全く止まざりき。
法王と蒙古 この頃恰も蒙古が歐亞の間に大國を立て、
キリスト教徒は蒙古の侵略に恐怖せし際なりしかば、法王
は蒙古と通じて土耳其夾撃を謀りしも、唯東西の交通を開
きたるに止まり、征役の擧は行はれざりき。

第三篇 近古期

第一章 文運の復興 社會の變遷

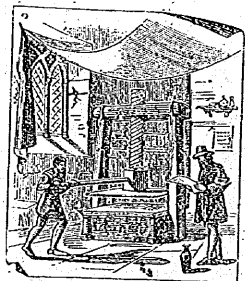
法王權の失墜 第十一世紀末より第十三世紀まで歐洲
を風靡せし法王の權勢は、第十四世紀に至りて漸く振はざ
るに至れり。佛王フィリポ四世は工業を獎勵し、法律を改
正し、教會に税を課せしかば、ここに法王と衝突を起し、一三

皇紀一九六九
年 花園天皇の
朝 元武宗時代

〇九年佛王は遂に法王をあひひおんに擁立するに至りし
かば、法王の權勢は昔日の如くならざりき。

古文の研究 加之、十字軍の失敗は大に法王の主權と教
會の制度とを疑はしめたり。伊太利の諸市が海外と交通
するに及び希臘より學者を聘して希臘語を學び、希臘の哲
學醫學等を究むるもの多く、また、ラテン語を學びて羅馬人
の思想を究め、或はラテン語の聖書を精讀し、遂に大に教會
の弊害を論難するものあるに至れり。

皇紀二〇九六
年 後花園天皇
の朝 明英宗時代
刊書の術は
唐代より五
那に於てあ



活版の發明

印刷の發明 一四三六年ジョ
ン・グーテンベルヒがまいんつに木
製活字の法を發明するに及び、古書

并に學者の論文は容易く公にせられ、人智開發に資するものと多し。

美術 美術もまた希臘羅馬の古風を復興折衷し、所謂復活式なるもの起り、第十四世紀にはミカエル・アンジェロ等彫刻に、繪畫に、建築に、精巧の妙技をあらはし、ラファエロの繪畫またその名著し。



クルダン・ア・ジョ

常備軍の設置 佛王カロロ四世の歿後、佛國は百有餘年の間斷續英國と干戈を交え、佛國は一時危急に陥りしが、ジオ・ア・ン・ダルクといへる一少女の忠憤によりて、再び

おるれあ
城の關を解
きカロロ七
世を即位せ
しむ。

皇紀二一三
年後花園天皇
の朝
明皇時代

火器は一三
四六年に
始めの職に
ふられて用
いられたとい

元氣を恢復し、遂に一四五三年殆ど英國兵を國外に驅逐して局を結べり。この戰に、歩兵を雇ひて軍隊を補充するの利便なるを發見せしかば、歐洲諸國は争ひて歩兵を採用し、常備軍を置くに至り、從つて封建制度は頽敗して王權益々重くなりぬ。

火器の發明 加之、當時火器發明せられ、これを戰爭に利用せしかば、鐵製の大砲はよく城壁を破壊し、小銃はよく武士の甲冑を貫くを以て、貴族武士は軍事上社會上全くその位置を失へり。

第二章 新陸地發見

土耳其の勃興 十字軍の末、おすまん土耳其族蒙古に追

はれて亞細亞の西部に移り來りしが、第十四世紀末にはその勢漸く強く、その東方に勃興せるチムールと相競ひしが、第十五世紀の初め、一時遂にチムールに滅ぼされたり。然るにチムールの歿するや、土耳其再び起り、一四五三年には東羅馬帝國を滅ぼするに至れり。

亞弗利加回航 土耳其の勃興は著しく歐洲の東方交通貿易を阻害せしかば、好奇遠征の情盛なる歐洲人は、東洋に至るべき他の通路をもとめんことを欲せり。葡萄牙に於ては夙に天文を研究し、磁針を利用して、大に航海の術を究め、亞弗利加の西岸を探検し來りしが、ジョアン二世の時、一四八六年バルトロメオ・ヂ・アズ・ブー・ド・アル・カマに達し、一四九八年エマヌエル王の世に至り、バスコ・ダ・ガマ遂に亞弗利

皇紀二一四六年
年七、御門天
皇の朝、明
憲宗時代
皇紀二一五八
年、明の中世

加を回航して印度に着するを得たり。これより葡萄牙人は東方貿易に従事し、ごあに總督府を置き、東洋に貿易布教するに至れり。

新大陸の發見 伊太利の水夫コロムブスは、夙に諸の地



コロンブス

理書旅行記を案じ、りすぼんより西航するは印度に至るの捷徑なるを推算し、葡萄牙王英吉利王に説きて船舶の貸附を懇請せしが、皆納れられざりき。然るにかずちりあ女王イサベラこれを容れ、巾幗を賣りて大船を醸し、これをコロムブスに授けしかば、コロムブス航海すること約七十日、具さに辛酸を嘗め、一四九二年遂にさんさるばどるに着し、ついできうーば等の諸島

皇紀二一五二年
年、御門天
皇の朝、明
憲宗時代
皇紀二一五八
年、明の中世

あらごん王
フェルナ
ンドとかす
ちりあ女王
イサベラと
結婚合併
して西
班牙
國起る

皇紀二一八一
年後柏原天皇
の朝
明の中世

に達するを得たり。コロンブス即ち印度に至れりと自信し、植民して歸れり。

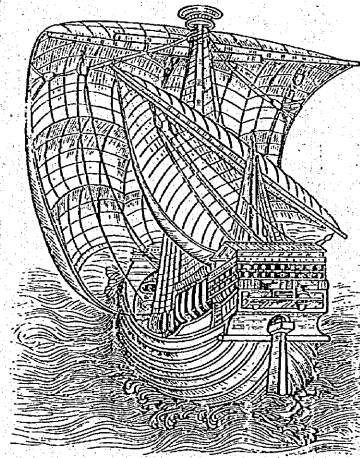
西班牙の植民 これより西班牙は船を出して中央亞米利加に植民し、漸くめき

しこべる。ちれを征服し、ここに無限の金銀を

得たり。葡萄牙人はまたぶらじるの東岸に漂

着してここに植民せり。世界の一週 これと

同時にマガリアエンスは西班牙王の命によりて南亞米利加を回航し、一五二一年太平洋を横ざりて、ふりっびん群



船の代時スブンロコ

島に至り、その土人に殺害せられしが、その部下遂に世界一週の功を竣へて西班牙に歸れり。この新世界の發見と、世界の球形なるを實際に證明したるは、大に歐洲人百般の思想を新にしたりき。

第三章 宗教改革

宗教改革の希圖 十字軍の後、キリスト教會は漸く腐敗し、上下舉りて財貨を貪るにつと

め、布教慈善の務をも忽にしき。古學の研究益に進むに及びては、教會の

弊習愈々暴露し、殊に法王レオ十世が殿堂建立を名とし、獨逸に免罪符販



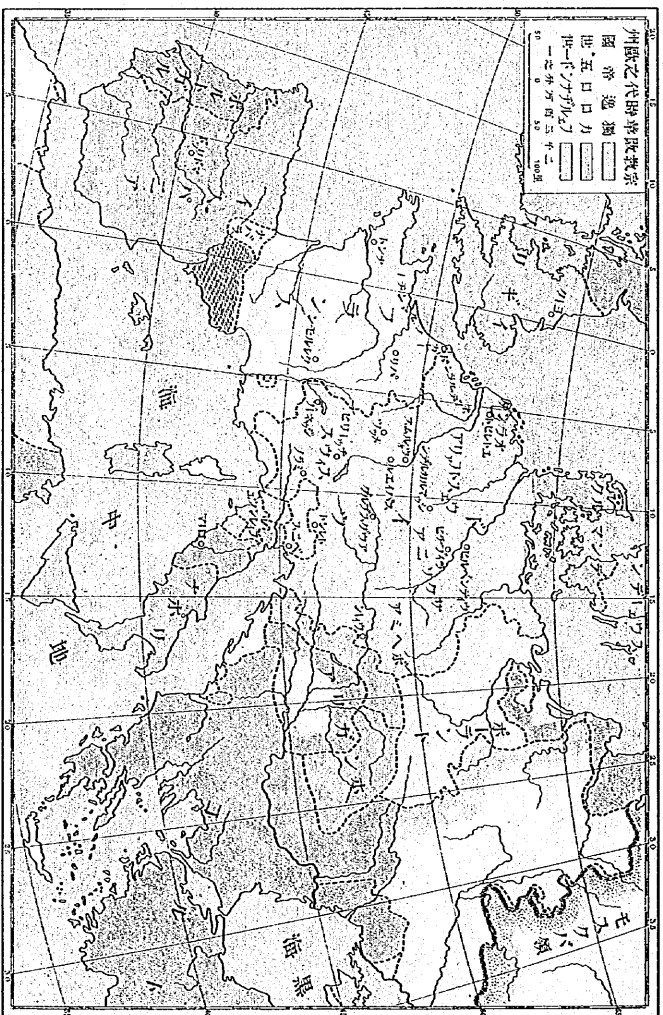
ル テ ル

皇紀二一七七
年柏原天皇
の朝
明の中世
ル・テールは
キリスト教に
とすべく、
吾人は信仰
罪を滅ぼす
べきを論ぜ

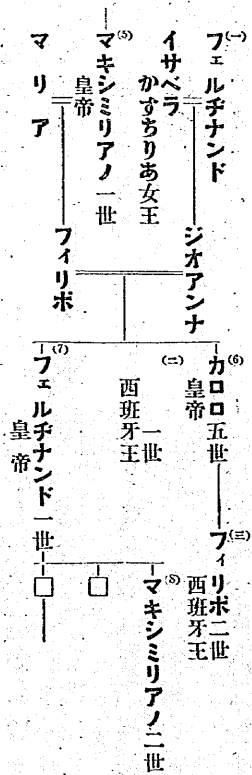
賣を許すに及び、ルーテルはその不法を認め、一五十七年う
 いてんべるぐ教會に抗議を掲げてこれに反對し、ついで
 らいふちひに公開論議を開き、法王の使節を論破せしかば、
 改革論甚だ盛になれり。同時に瑞西にもツウイングリ別
 に改革論を唱へたり。

カロロ五世の政策 時に西班牙王カロロ一世は獨逸の
 王位を兼ねて、カロロ五世と稱し、勢方に盛なりしかば、一舉
 してこの紛議を一掃せんとし、らゐるむずに國會を開き、ル
 ーテルを召してその説を聴かしめんとせり。然るにルー
 テルは堅く自説を持してその命を奉ぜざりしかば、遂にル
 ーテルを異流として、その法律保護を停止せしめたり。世
 佛王の反對 然るに佛王フランシス一世は、カロロ五世

太陽はわが
 領土に沒せ
 ず。



皇紀二一八九
年後奈良天皇
の御代
明世宗時代



の勢力強きに過ぐるを憂ひ居たりしが、恰も獨逸に宗教の紛擾起るに乘じ、兵を以て獨逸に侵入せり。帝止むを得ず、一時信仰の自由を許し、國內の一致協力によりて佛王を撃退せり。

新教起る 亂全く平ぐに及び、カロロ五世は一五二九年すばいえるに國會を開き、うおるむすの決議を實行せんと議せしが、改革派は抗議してこれに従はず、遂に新教の一派

を立ててこれに對抗せり。
 新教の蔓延 ここに於てルーテルの教は滔々として獨逸諸州に蔓延し、瑞典・丁抹の諸國も國內の改革とともにこれを奉ずるに至れり。

カルビンの新教 これと同時にカルビンまたじりねーぶに一派を立てしが、その所説は佛國、ねーでるらんとすこつとらんどに入りて勢を得たりき。

舊教の對抗 かく新教の勢盛なるに及び、カロ口五世は一五四五年とれんどに會議を開き、舊教の弊を改め、これを勵行することを決し、法王はイエスイタ教社を利用して舊教傳播につとめたり。

イエスイタ教社 イエスイタ教社は一五四〇年イグナ

皇紀二二〇五年
 後奈良天皇の朝
 明世宗時代

皇紀二二〇五年
 後奈良天皇の朝
 明世宗時代

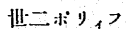
チオ、ロヨラの組織せるものにして、身體強健才智衆に擢んづるものを選びて、これに嚴格なる教育を施し、社長の命を受けて布教に従事せるものなり。教社は印度及び極東にも布教し、その領袖ザビエールはわが國に至り、マテオリツチ等は支那に布教せり。切支丹宗又は天主教といへるはこれなり。

宗教媾和 かくカロ口五世は最も意を舊教恢復に盡ししも、佛王ヘンリ二世并に獨逸諸侯の反抗にあひて遂に一五五五年あらざるの宗教媾和により、獨逸にルーテル派の新教を公許するの止むなきに至れり。

カロ口五世の讓位 カロ口五世は百事皆心と違ひ、内治外交全く失敗せしかば、一五五六年位をその弟フェルデナ

皇紀二二〇六年
 後奈良天皇の朝
 明世宗時代

フィリポ二世の方針
フィリポ二世は熱心に舊教を奉

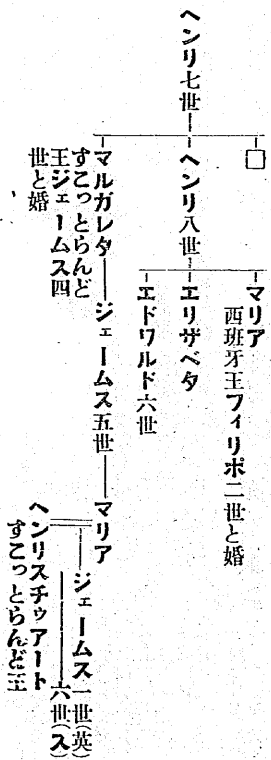


フィリポ二世は熱心に舊教を奉じ、各國の新教を撲滅するを以て己が任となし、強大の兵と巨萬の富とを以て新教の勢焰を挫がんことを期したり。

和蘭の獨立宣言　フィリポ二世はまつその領土ねーで
るらんだの新敎を廢し、各市の特權を奪ひしかば北部七州
の人民蜂起し、おらんじう公ウィルレムを戴き、一五八一年
遂に獨立を宣言し、國を和蘭と稱し、ウィルレムを推して世

皇紀二二四一
年正親町天皇
の朝
明神宗時代

襲の統領たらしめたり。



英國の國教制定　英國の宗教は、ヘンリ八世が國會の協賛によりて法王の管轄を脱し、教會を獨立せしめしが、その子エドワルド六世の時全く新教となれり。王歿して姉マリヤ立つに及び、フィリポ二世の妃たりしかば、國教を改めて舊教に復せり。幾もなくマリヤ歿してエリザベタ立つ。女王は英邁の天資を有し、よく國內の形勢を達觀し、結婚の

皇紀二二四八年
後陽成天皇
の朝
明神宗時代



王女タベウリエ

内治に不利なるを認め、終生獨身を以て政治を統べ、新舊兩派を折衷して新にエビスコバル教を制定し、みづから政教上の主權者となれり。

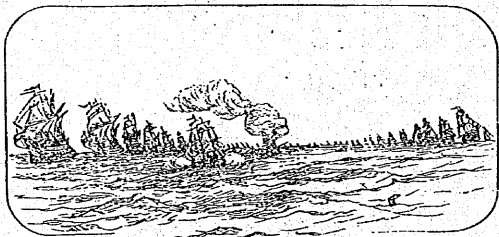
英國の新教援助 然れども女王は毎に新教徒に同情を表し、和蘭の獨立を援助し、佛國の新教徒を助けて、フィリポ二世の政策に反抗せしかば、フィリポ二世は憤怒禁ずる能はず、必勝艦隊を編成して神聖軍と稱じ、一五八八年大舉して英國を屠らんとせしが、英國人は

明神宗時代

皇紀二二七八年
後水尾天皇の朝
明神宗時代

非常の愛國心を喚起し、急に兵備を整へ、遂にこれをかれー港に破れり。西班牙の軍艦港外に逃れたるものまた率ね撃沈せられ、フィリポ二世の政教上の計畫はこゝに全く挫折せり。

獨逸三十年戰 かく新舊兩派の競争は、毎に政治上の諸問題に伴ひて、第十六世紀より第十七世紀中頃に至るまで、約百五十年間歐洲を騒がせたり。ことに皇帝マチアスは一六一八年従弟フェルチナンドをぼへみあ王とし、その新教教會を破壊せしむるに及び、こゝに三十年間の大



役の隊艦勝必

皇紀二二〇八年
後光明天皇
の朝
の末世

紛擾を惹起し、丁抹王キリスチアン四世、瑞典王グスタフアドルフ等前後來りて新教徒を援け、佛國の相リシッリウーも兵を出して瑞典軍を援け、大に獨逸及び西班牙の聯合の勢を破りぬ。こゝに於て一六四八年列國はうえずとふりあに會して媾和條約を締結し、帝國內諸邦に政教の自由を許し、瑞西及び和蘭の獨立を公認せり。

第四章 東洋及び南洋に於ける

葡萄牙・西班牙・和蘭・英吉利

葡萄牙の植民貿易 歐洲に政教上の紛争盛に行はるゝ間に、東洋に於ける植民・布教の事業は屢々として大に歩を進めたり。葡萄牙は一五一〇年ごあに總督府を置き、せい

皇紀二二七〇年
後柏原天皇
の朝
明武宗時代

ろん暹羅に貿易を開き、おるむず島を奪ひ、東洋貿易の基礎を定め、漸次東進して阿瑪港を占領し、わが國及び支那に來往せり。

皇紀二二二二年
正親町天皇
の朝
明世宗時代

西班牙の植民貿易 西班牙は王フィリポ二世の時、愈々東洋經略を定め、ふいりっびん群島の呂宋を占領して、(一五六二年)

まにらを根據とし、支那及びわが國に來往せり。和蘭の植民貿易 和蘭人はもと葡萄牙・西班牙の貨物輸送を業とし、東洋貿易の利を熟知せり。その西班牙に對して獨立を宣言するや、西班牙の貿易を妨げ、植民地を侵略せり。ことに和蘭は新教を信じて、葡西兩國の如く頑冥ならざりしかば、各地の歡迎する所となれり。

英吉利の航海貿易 英國はエリザベタの朝、新大陸に植

皇紀二六〇
年
後陽成天皇の
朝

明神宗時代

皇紀二六二
年
後陽成天皇
の朝
明神宗時代

民するとともに、東洋及び南洋に注目し、ドレーク・ローリーの如きは世界を航行して西班牙の船舶を掠奪せり。一五八八年英國が西班牙の必勝艦隊を破りし後、ちは西班牙はこの戦敗によりて海上權を失ひ、呂宋に於ける東洋貿易も衰へ、新大陸との交通運搬も安全なる能はずして國力頓に銷沈せり。英國はこの機に乗じて、一六〇〇年東印度商社を建て、もんでる皇帝の許可を得てずらとを開き、東洋貿易の根據となせり。

英蘭兩國の競争 和蘭も一六〇二年に東印度商社を建て、各地の葡西兩國人を驅逐し、ばなびあに根據地を置き、後ちまた倭寇を攘ひて臺灣に據り、東洋貿易の覇權を握れり。英國の東洋貿易は著しく和蘭人に妨げられしかば、専ら意

皇紀二三一
年
後光明天皇
の朝
明の末世

航海條例は英國の船に製造あらざれば貨物を英に輸入し能む。



(幣貨) ルエウム ロク

を印度に注ぎまどらず、ほんべいべんが、る等に勢力を占むるに至れり。
和蘭の勢衰ふ かくて一六五一年英國は航海條例を發布して和蘭の運搬を妨害し、兵を出して、大に和蘭の海軍を破りしかば、英國の植民貿易は遂に和蘭の右に出づるに至れり。

第五章 英佛植民狀況 ルイス十四世

英國の新大陸植民 英國は東洋の經營に従事したるのみならず、また大に亞米利加の開拓に留意し、エリザベタの朝ロリー等ば^しに^あに植民し、以來國教を喜ばざるも

軍隊に制服を着用せしむるはこの時に始まる。

コルベールは原料を外國にとり、國產物を外國に賣りて、國內の金銀を増殖して



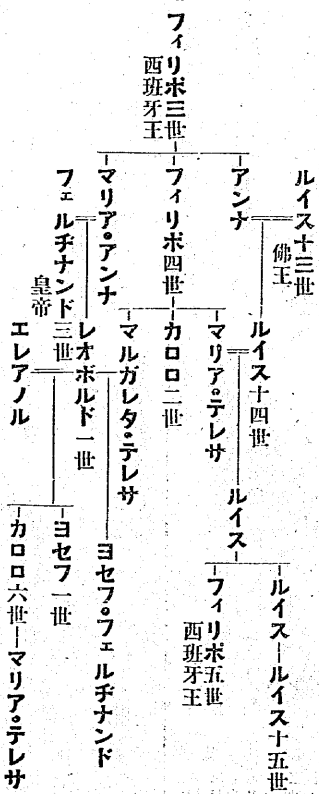
世四十スイル

等の植民地を開き、印度にはぼんざしりーを得て英人と競争し、後印度諸國を窺へり。

て以て國富
を致す所以
なりとす。

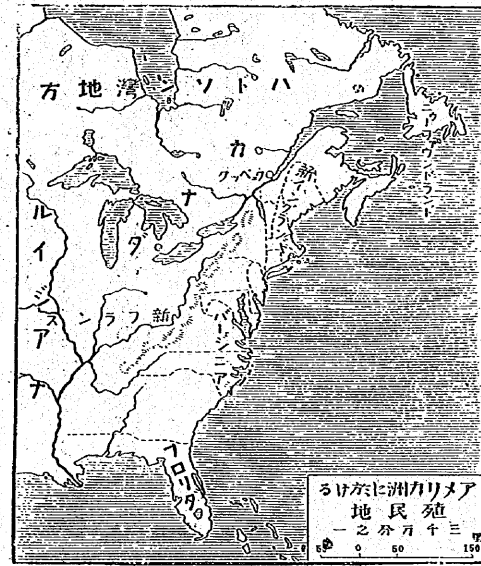
佛王ルイス十四世　ルイス十四世佛國に主たるに及び
大藏卿コルベールを信任し、内には製造工業を奨励し、運搬
貿易を保護し、外にはかなだるいじあね等の植民地を領有
し、和蘭英吉利と競争して雌雄を爭へり。

西班牙相續問題 適、西班牙王カロロ二世嗣子なく、その領土をルイス十四世の孫フィリポに譲らんことを約して



皇紀二三六一
年
東山天皇の朝
清聖祖時代

歿せり。ルイス十四世大に喜び、一七〇一年フィリポを西班牙に擁立してフィリポ五世と稱せしめたり。然るに獨逸皇帝レオポルド一世はその第二子カロルを立てんと欲してこれに反抗し、英蘭兩國は獨逸に左袒せしかば、こゝに一大戦争起りぬ。時に英國の海軍最も優勢なり、じぶらるなるを攻撃してこれを陥れ、みのるかを略し、また多く佛國の植民地を攻



皇紀二三七三
年
東山天皇の朝
清聖祖時代

略せり。然るに獨逸にカロル六世帝位を踐むに及び歐洲諸國は獨逸兩國の合併せんことを憂ひ、一七一三年ゆとれひとに特別條約を結び、翌年佛蘭兩國はらずたつとに會し、ともにフィリポ五世を承認し、英國は西班牙よりじぶらるたる及びみのるかを得、佛國よりはどそん灣地方に、上ふあらんどらんど等を得、埃土利はぬーてゐらんど等を得たり。

英國の優勢 英國の海軍は着々武威を發揚して海上權を收め、その植民貿易の事業は益々隆運に向ひ、その勢力は遂に歐洲の首位を占むるに至れり。

第六章 ペテロ大帝

露西亞の東進 西歐諸國が東洋に植民貿易を經營するに當り、露國は亞細亞の北部に經營の歩を進めたり。露國



帝大ロテベ

は皇帝イバン四世があすたらか
んを滅ぼし、一五五五年頃より漸
くしべりあ開拓の端を開き、こさ
っくを服し、東方諸汗と交通を開
けり。第十七世紀の初め、ミカエ
ル立つに及び、益々探險征服をつとめ、市城を築き、軍政を施し、
また黒龍江岸を探險せり。
ペーロ大帝 一六五〇年ハバロフ雅克薩を取り翌年こ
こにあるばじん城を築き、清の聖祖は愛琿城を築きて
三八三北邊を鎮し、遂にあるばじん城を陥れたり。ペテロ大

皇紀二三一〇
年、後光明天皇
の朝、末世
皇紀二三四三
年、元天皇の朝
清聖宗時代

皇紀二三四九
年、東山天皇の朝
清聖宗時代
皇紀二三八七
年、中御門天皇
の朝、清聖宗時代

あむする
だむびる
んどんは
職工として
半歳を費せ
り

帝は使を尼布楚に派して、外興安嶺山脈等を以て兩國の國境とせり。(一六八九年)これにより露國の東方經略は一時阻害せられたるも、大帝は恰克圖に互市場を開き、(一七二七年)驛傳を置き、民政を施き、大にしべりあ内政の改革を行へり。

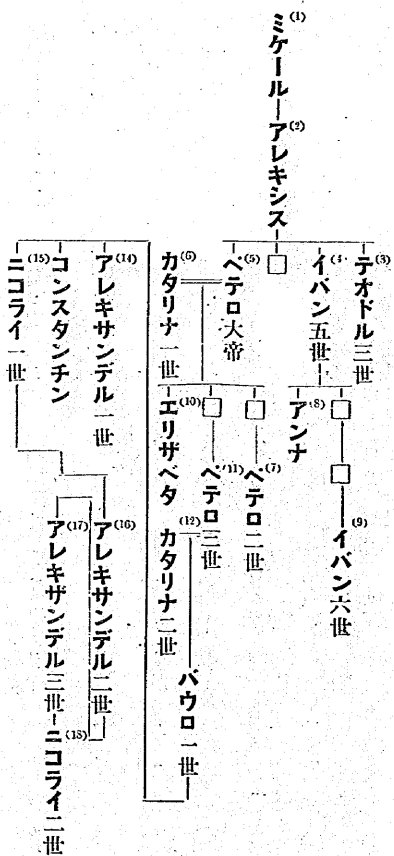
大帝の西方經營 大帝は西歐諸國と交通を開きてその開化を輸入せんことを欲し、位に即くの初め、まづ土耳其を討ちてあぞふ海邊を奪ひ、更に瑞典よりぼると海岸を略取せんことを畫せり。大帝親ら歐洲諸國を微行歴遊して、その文化を視察し、學術を修め、造船の法を學べり。そのもすぐばに歸りて後ちは、悉く西歐の文物を移植し、兵式を模して士卒を訓練し、學校を建て、工場を設け、政教の大權を握りて、銳意國內の改良を圖れり。

皇紀二三八一
年中御門天皇
清和朝時代

北方戦争 時に瑞典王カロク十二世幼冲にして人心動搖せり。大帝これを機とし、波蘭^{ポーランド}丁抹と聯合して瑞典を攻撃せり。カロク十二世連りに聯合軍を破りしが、遂にぼるなばに敗れて土耳其に走り、ついで國に歸りて戦歿せり。瑞典乃ち恐怖して、一七二一年、はすなつとに和を成し、ばると海東岸の地を露西亞に譲りて和を結べり。

内治の整備 大帝はせんとべてるぶるぐ府を建てて、ここに都し、大に國政を改良し、陸海軍を整備し、製造貿易を盛にし、實に露國隆盛の基を定めたり。

カタリナ一世 大帝の後カタリナ才幹あり、帝の大業を佐けしこと少からず。帝歿して後、位に即き、カタリナ一世と稱す。



第七章 フレデリキ大王 英佛露の植民

普魯西 露西亞が歐洲の東北部に勃興するや、幾ならずして普魯西また起りて歐洲の局面を一變せり。普魯西は獨逸の東北にある一小邦なり。第十八世紀の初めフレデ

皇紀二四〇〇
年
櫻町天皇の朝
高宗時代

リキ一世べるりんに都して王國の基を開き、その子フレデリキ、ウィルレム一世勤儉にして武を尚び、盛に兵を養へり。一七四〇年子フレデリキ大王立つに及び、精兵を擁して、ひそかに時機を窺へり。

奥國相續の問題　これよりさき、奥國王カロロ六世男嗣なきを憂ひ、新に相續法を定めて、領土を王女マリア・テレサ譲らんとし、列國の承認を得たりき。然るに王の歿後、さきそにあ王及びばわりあ公はこれを非認せしかば、大王は新相續法承認の報酬として、しれしあを得んことをもとめ、精銳の兵を以て直ちにこれを占領せり。ここに於て佛國はばわりあを援け、英國は奥國を援けて、一七四一年大戦争起れり。

皇紀二四〇八
年
桃園天皇の朝
高宗時代



サレテアリマ

戦争　ばわりあ公は大舉して奥國に入り、みづから王位につき、カロロ七位と稱す。マリア・テレサ走りてほんがりあに至り、國人に哀訴し、僅に奥國を恢復するを得しが、大勢遂に利あらざりき。この時印度に於ては、佛國の印度總督デュープレーヌは英人を攻撃してまどらずを畧取し、大に佛國の威名を擧げたり。已にして一七四八年列國は遂にあーへんに條約を結び、奥國は普魯西のしれしあ領有及び奥國の新相續法を確認し、英佛兩國は各その侵地を還附して和せり。

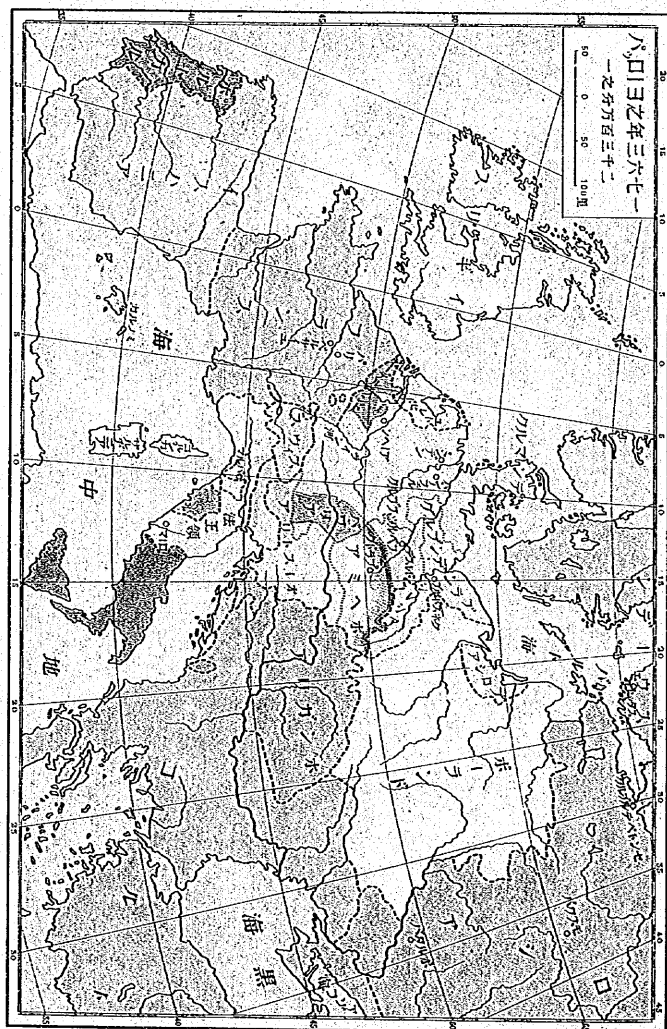
戦後の形勢　マリア・テレサは性溫雅なれども剛毅の氣

象に富む。毎にしれしあ割譲を憤り、経費を節して、財政を整へ、普國に倣ひて軍制を改め、列國の同盟と同情とによりて、ひたすら恢復の機を待てり。フレデリキ大王益々軍隊を精練し、道路を修築し、國民の分業法を定めて富強を計り、私に埒國に備ふる所ありき。

七年戦争の原因 然るに英佛兩國ははうーふらんどらんど漁業問題につきて葛藤を起し、再び干戈相見ゆるに至りしが、英國ははんのふえるの安危を慮りて普國と同盟し、和蘭は露國とともに埒國を援け、一七五六年、七年間の兵亂また起りぬ。

戦争 フレデリキ大王は孤軍を率ゐて連りに敵軍を破り、兵威一時盛なりしが、くねるすどるふの戦に埒露の聯合

皇和二十四一六年
年統國天皇の
朝
清高宗の朝

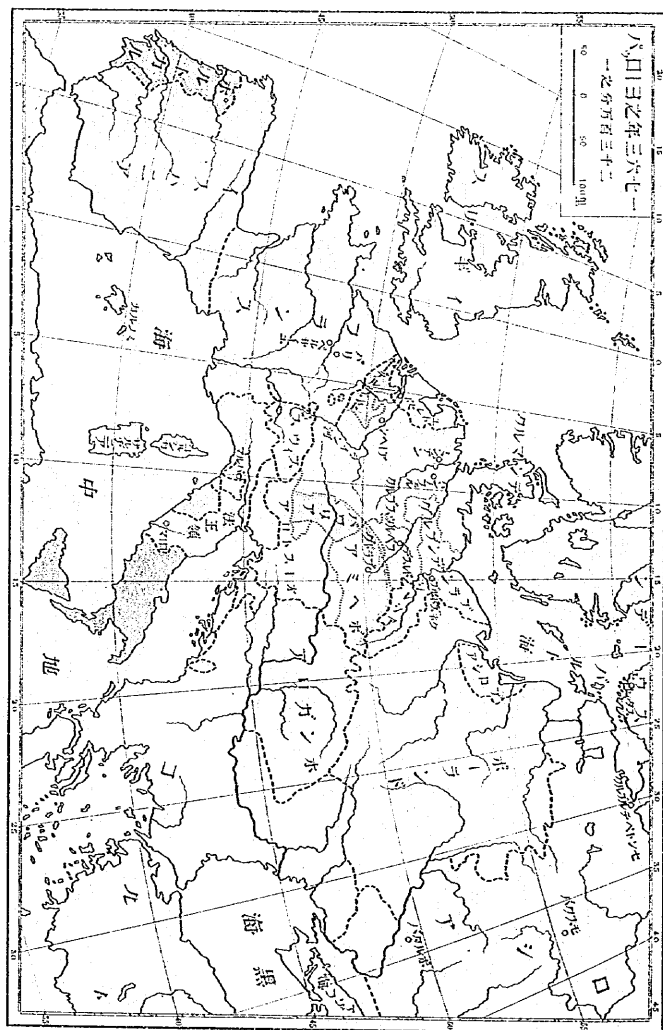


象に富む。毎にしれしあ割譲を憤り、経費を節して財政を整へ、普國に倣ひて軍制を改め、列國の同盟と同情とによりて、ひたすら恢復の機を待てり。フレデリキ大王益々軍隊を精練し、道路を修築し、國民の分業法を定めて富強を計り、私に埒國に備ふる所ありき。

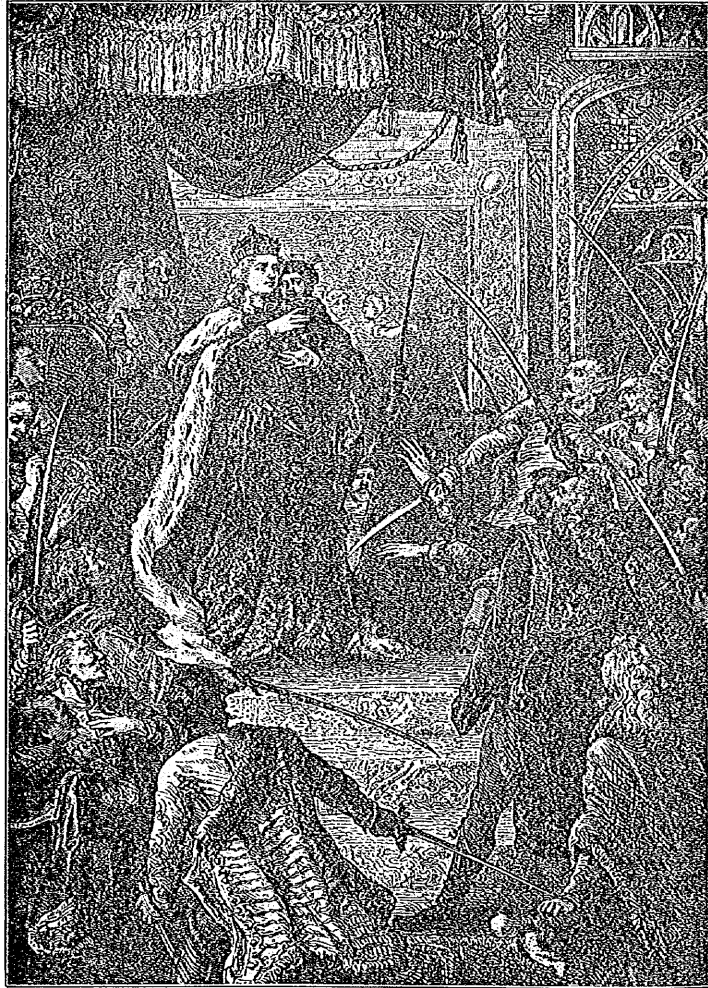
七年戦争の原因 然るに英佛兩國ははうーふらんどらんど漁業問題につきて葛藤を起し、再び干戈相見ゆるに至りしが、英國ははんのふえるの安危を慮りて普國と同盟し、和蘭は露國とともに埒國を援け、一七五六年、七年間の兵亂また起りぬ。

戦争 フレデリキ大王は孤軍を率ゐて連りに敵軍を破り、兵威一時盛なりしが、くねるずどるふの戦に埒露の聯合

皇紀二四一六年
徳川天皇の朝
清高宗の朝



薩レテ・ヤリマ・は・が・ん・に・あ・り・た・る・哀・訴・の・図



皇紀二四一七
年桃國天皇の
初
清高宗時代

皇紀二四二三
年後櫻町天皇
の朝
清高宗時代

軍に破られてより、普國の命運旦夕に迫り、大王も遂に死を
決するに至れり。然るに會々露帝ベテロ三世位に即き、普
國と和を結びしかば、フレデリキ大王はここに再び勢を得
たり。已にして露國女帝カタリナ二世立ち、その援軍を撤
回せんとするに及び、また大に奧國の軍を破れり。

莫佛の植民地戰　亞米利加に於ては、英國はけべくを
陥れて、かなだを占領し、印度に於ては、英人クライブは佛人
と同盟せるべるがるの領主等の大軍をぶらっしーに破り、
大に印度に於ける佛國の勢焰を挫けり。

講和　されば佛國力竭き、一七六三年、パリに條約を結
び、かなだぐらなだせぬがるを英國に割譲し、西班牙にるい
じあなを與へて、ふろりだを得、これを英國に與へたり。普

埃兩國はまたふべるつずぶるぐに和議を結び普國のしれしあ領有を確認せり。

ぼつぽむに宮殿を造る。水車あり。べるり。んに判官あり。

戦争の結果 英國はこの戦争によりて廣大なる領土を得たるのみならず、印度に於ては佛人に代りて印度を經畧する地歩を得たり。また普國はこの戦争によりて寸土を得ることなかりしも、よく強國の列に加はるの位置を得たり。大王は戦後疲弊を恢復することを力め、貧民を賑恤し、また文學・美術を奨励し、行政・司法の別を確立し、普國をして益々隆運に赴かしめたり。

ぼーらんど分割 フレデリキ大王はまたぼーらんど分割に干與せり。時に露國女帝カタリナ二世大志を抱き、ぼーらんど王アウグスト三世の歿するに及び、フレデリキ大



世二ナリタカ

王と議りて、己れの寵臣ポニアトウ・スキーを王とし、王に迫りてギリシア教徒をして舊教徒と同等の權を得しめき。ぼーらんど人はこれを喜ばず、叛亂を起し、援を土耳其にもとめたり。

カタリナ二世兵を出して、くりむ半島を征服し、どなう河に及べり。フレデリキ大王これを見、露國の土耳其に要むること必ず大ならんことを憂ひ、マリ・ア・テレサと議り、カタリナ二世とぼーらんど分割の議を決し、一七七二年三國遂にその一部を分割し、露國はくりむを併せて和を土耳其に許せり。蒙古の餘類くりむ汗國ここに滅ぶ。

ぼーらんどの滅亡 ぼーらんどは第一分割にあふの後

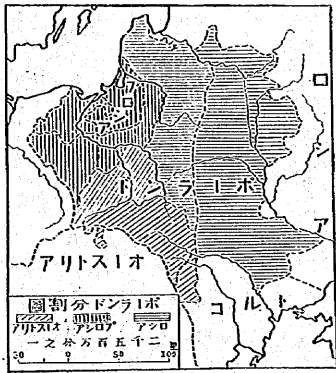
皇紀二四三二年
後桃園天皇
の朝
清高宗時代

皇紀二四五三
年光格天皇の
御高宗時代

皇紀二四五五
年光格天皇の
御高宗時代

ち、普魯西の聲援によりて大に内治を改良し、衰運を挽回せんとせしが、守舊派はこれを喜ばず、露國の援によりてこれに反抗せしかば、カタリナ二世は普國とともに一七九三年またその一部を分割せり。その後ちぼーらんの騷亂に乘じ、露普奧三國は遂にその全部を分配し、ぼーらんとを滅ぼせり、(一七九五年)

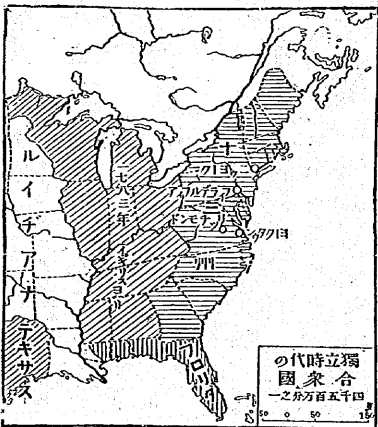
帝國復興策 カタリナ二世は土耳其を歐洲より驅逐し、都をこんすたんちのぶるに奠めて、東羅馬帝國を再興せんとし、奧國と連合して土耳其の北部を奪へり。



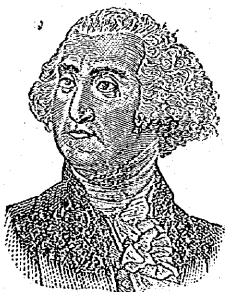
東方の經營 加之、女帝はまた東方の經略を進め、あれりと群島あらずかを探検拓殖せしめ、またわが北部諸島を巡廻せしめたりき。

第八章 亞米利加合衆國の獨立

獨立の原因 英國はかく數度の大戰によりて大に植民地を擴張し、國威を發揚せしが、國債これが爲めに著しく増加し、財政頗る困難に陥りぬ。されば英王ジョージ三世は印紙條令を制定し、亞米利加に於ける



皇紀二四三六
年
後桃園天皇の
朝
高宗時代



ントンショウ

植民地に税を課してこれを救はんとせしかば、十三州の植民地はこれを憤り、ともにぼろーよるくに會し、代議士を出さざるものは全く納税の義務なきを論じ、フランクリンを遣はして印紙條例廢止を請願せしめたり。英國政府は一時これを聽許せしも、後ち更に茶等に税を課せしかば、植民地は益々激昂して亂を作し、ふいらてるふいあに會議を開き、ウォシントンを總督に舉げ、再びフランクリン等を列國に遣はして援助を乞はしめ、一七七六年遂に獨立を宣言せり。

戰鬪　ここに於て、かねて英國を惡める佛國の士民は爭うて援に赴きぬ。英軍は道路の粗惡なると糧食の缺乏と

皇紀二四四三
年
光格天皇の
朝
高宗時代

皇紀二四四七
年
孝格天皇の
朝
高宗時代

により、容易く征討の功を奏せず。佛國は公然植民地を援助せり。露國女帝カタリナ二世は歐洲諸國と中立同盟を結び、陰にこれに應援せり。

媾和　英國は和蘭の海軍を破りて中立同盟を解くを得しも、陸軍は全く敗れ、遂に一七八三年ぼろー及びべるさいゆに於て和議を結び、植民地十三州の獨立を承認せり。

合衆共和の憲法　かく植民地は全く獨立せしも、漸次統一の必要を認め、更にふいらてるふいあに會議を開き、一七八七年新に憲法を定めて國體を合衆共和とし、大統領を置き、四ヶ年の任期を以て萬機を統べしむ。また上下兩院の議會を置きて立法權を委ね、各州は皆共和自治の制を採らしめたり。ウォシントンを舉げられて大統領となり、誠意政

治に勵みしかば、合衆國これより漸く強し。
マリア ウォシントンの母マリア賢にして子を訓ふること嚴正、而も天稟の性を屈せず、獨立の戦起るや、みづから農事を勤め、貧民を救ひ、郷里をして飢餓に陥らしめざりとぞ。

第九章 十八世紀歐洲の情勢

哲學 近古期の初め文學復興せられ、思想界は自由となりしかば、人智大に進み、學術は一段の進歩を成せり。哲學には第十七世紀の初め英人ベークン等の唱道せる經驗派と佛人デカルト等の唱ふる推理派と、兩者相對立し、互に辯難して眞理を究むるにつとめたり。

科學 科學には英人ニュートン引力の原則を説き、獨逸人ケプレルは天體運行の法則を發見せり。瑞典人リンネは植物の系統を立て、佛人ラヴォアジエールは化學を大成せり。米人フランクリンは電氣の理を説き、英人ハーバーは血液の循環を發見せり。その他望遠鏡、排氣鐘、對數表等新奇の發明續出して、科學界は實に長足の進歩を成せり。

文學 英國にはエリザベタの朝シエクスピア出て、十八世紀にはゴールドスミス、ミルトン等名を著はせり。佛國にはルイス十四世の代に、ゴルネールあり、獨逸にシルレル、レッシング等出て、皆一代の文豪と稱せらる。

美術 美術に至りては、ミケランジェロ時代以來、復活式行はれしかど、なほその當時の隆盛に及ぶ能はざりき。唯

佛國ルイス十四世時代や、その趣を異にせるあるのみ。繪畫には伊太利にラムプレヒト等の大家出て、漸次發達の氣運に向へり。

政治上の問題 近古期の初め、歐洲諸國は各その國家の繁榮を希圖し、政治上の問題は率ね宗教問題と相待ちて續出し、優勝劣敗の大競争を試みしが、うえずとふありあ條約締結以後は、單に國家の利害より打算して、凡て貴金主義保護貿易主義を執り、益、多數の原料供給製造品需要の土地を得んことをつとめ、互に干戈相見えて倦むなきの有様なりき。而して國內の政治に至りては、立憲自由主義と、專制主義と、相對立して下らざりき。

自由主義 英國は第十三世紀以來立憲自由主義を執り、

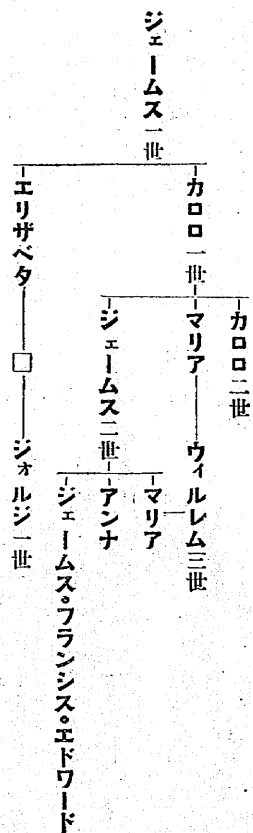
皇紀二二八九年
後水尾天皇
の朝の末世

皇紀二三〇九年
後光明天皇
の朝
皇紀二三二〇年
西院天皇
の朝

第十六世紀には議會は國王の繼承に容喙するの**有様**なりしに、第十七世紀の初めジェームス一世、エリザベタ女王の後を承くるに及び、王權神聖論を唱へ、王權は神聖にして憲法も國會もこれを制限すべきものに非ずと稱し、大に輿論の反對を受けたり。その子カロロ一世もまたこれを唱へて屢、國會を解散し、遂には國會を廢止して專制政治を行ひ、**(一六二九年)**或は兵力を以て國會黨を攻撃するの舉に出てしかば、王は遂に國會の爲めに弑せられて、國は共和政治となりぬ。**(一六四九年)**その後溫和黨出で、カロロ二世を王に迎へ、**(一六六〇年)**各種の法律を制定して國教の維持と民權の擁護とを圖りしに、王弟ジェームス二世立ち、その國法を破りしかば、國會は使を和蘭に遣はし、和蘭の統領ウイルレム三世及びそ

皇紀二三三八
年東天皇の
清嘉祥時代

の妃マリアを迎へ、一六八八年王及び女王をして憲法を遵守すべきを誓はしめたり。これを英國革命と稱す。この立憲自由主義は和蘭、ポーランド、瑞典、ノルウェー等數邦の採用する所となれり。



皇紀二二七四
年後水尾天皇
の朝
明神宗時代

專制主義 專制主義の中心は佛國なりとす。佛國も久しく立憲政治を行ひ來りしが、第十七世紀の初め、ルイス十三世の時、攝政太后マリア國會を廢止して再び開かず、(一六

皇紀二二八四
年後水尾天皇
の朝
明の末世

皇紀二三二一
年後西院天皇
の朝

年)リッリッ相たるに及び、(一六二四年)大に貴族の權勢を殺ぎ、ぱり高等法院を壓服して王權の伸張を計りしが、ルイス十四世政治を親からするに及び、(一六六一年)内には殖産工業を保護し、外には武威を宣揚して大に領土を擴張せり。輪奐



妃の世四十スイル

歐洲諸國は佛國の文明を欣慕してこれを模倣し、佛國語は自然外交通語となるに至れり。然れども生活の奢侈安逸は誠に外觀の美に止まり、百物皆形式に流れて高尚なる新思想を發揮するに足らず、壓政盛に行はれ、庶民困厄して堵

に安んぜざるもの多し。

革新文學 ここに於て佛國のボルテールは教會に對してその人を束縛するを責め、國家に對しては庶民の困厄を救はんことを要めたり。ついでモンテスキュー出でて、立憲政體の美を説けり。加之、ルーソーは野蠻原始の社會を理想とし、人類は自由平等の權を有するを説き、法律習慣その他の文物を破壊するを以て唯一の救済策なりと唱へたり。その議論は論據明確ならず、また歴史的觀念を棄て、國情風俗を顧みざる説なれども、當時華美と壓制とを厭へる人心は、その流麗なる文辭と、巧妙なる論法に眩惑せられ、これを信ずるに吝ならず、遂に後世の一大主義となり、屢禍害の源となるに至れり。

富國策 その他英人アダムスミスの富國策はワットの發明せる蒸氣機關の利用と相待ちて政治上經濟上に一大變化を起すの因となりき。

第四編 近古期

第一章 佛國大革命

大革命の原因 佛國は歐洲文明の中心と誇稱し來りしが、内政の紊亂と外征の結果とにより財政困難に陥れり。貴族・教正は奢侈安逸を貪れども、下民は重税に堪えずして飢餓に苦しみ、ルーソー・モンテスキュー等の民權自由平等の論を讀みて、これを夢想し、合衆國の憲法を見てこれを羨み、人心漸く穩ならず。

皇紀二四四九
年光格天皇の
清高宗時代

革命の動機 ルイス十六世はネッケルを用ゐ、一七八九年國會をべるさいゆに召集し、公議によりて弊政を革めんとしき。平民は貴族敎正の改革を妨害せんことを憤り、みづから國民議會を開き、ばりーの暴民は蜂起してばすちゆの牢獄を破壊せり。

大改革決定 國民議會は恣に憲法を議定し、敎正貴族の特權を全廢し、國內を州郡に平分して自治制を行はしめ、王に迫りてこれを裁可せしめたり。

佛國の國歌
はこの時歌
ひしものな
り。

王權停止 新憲法によりて成れる立法議會は共和黨多數を占めしかば、王は惧れて援を奧地利に乞へり。議會は兵をまるせいゆに募りてこれに當り、遂に王を幽閉して王權を停止せり。

皇紀二四五二
年光格天皇の
清高宗時代

自由・平等・
眞理の女神
を祭る。

皇紀二四五五
年光格天皇の
清仁宗時代

王の弑虐 已にして一七九二年國民會起り、九月二十二日王政を廢して共和政治とし、翌年王を斷頭機上に弑せり。秩序壞亂 英相ピットはこの横暴を惡み、列國と聯合して革命黨を討てり。佛國乃ち公安委員を置きて時局に當らしむ。然るに公安委員は漫りに反對黨を殺戮し、キリスト敎を全廢し、狂暴殘虐到らざるなく、遂に公安委員互に相殺戮し、社會の秩序安寧全く破壊せられて、人心恟々たり。理事政府成る ここに於て國民會の議員は禍の身に及ばんことを憂ひ、過激黨の首領ロベスピエールを銃殺し、公安委員を解散し、一七九五年新に理事政府を置き、國內稍鎮靜に至りぬ。

第二章 ナポレオンの偉業

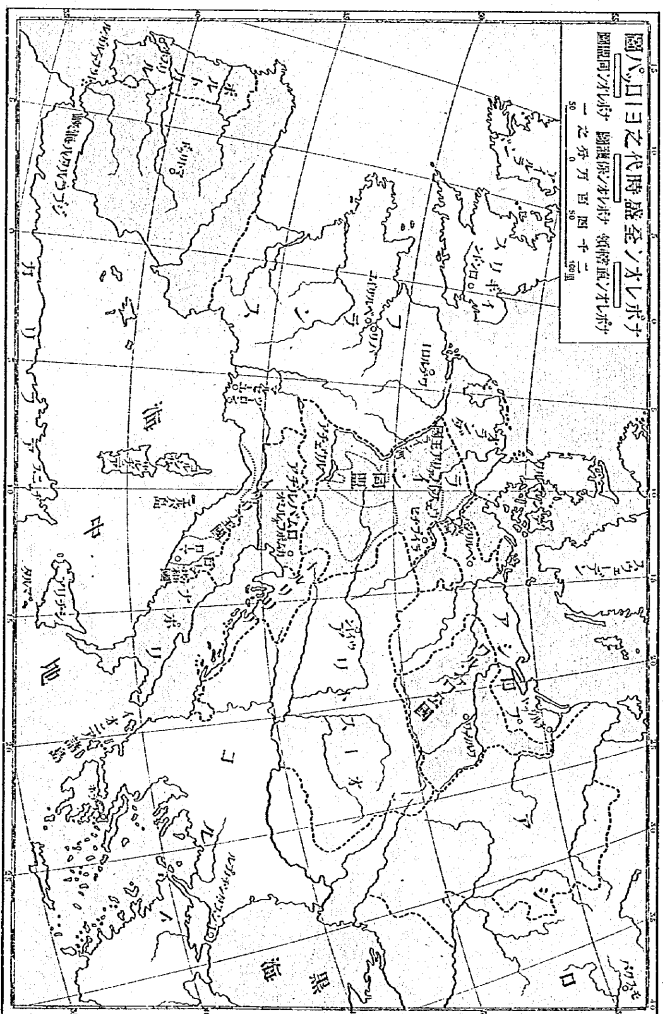
和蘭滅亡 列國の聯合に對しては、國民會は六十萬の壯丁を驅りてこれに當らしめ、列國の一致を缺けるに乘じて、和蘭を滅ぼし、普魯西班牙をして和を請はしめき。ここに於てなほ戰を繼續するものは英、奧兩國あるのみ。而してこれが攻守の任に當るものは實にナポレオン・ボナパルトなりとす。

(第一塊戰役)
(えじぶと戰役)

(第二回大聯合)

伊太利及びえじぶと遠征 ナポレオンは理事政府の命によりて伊太利に進撃し、奧軍を破りてろむばるぢあ及びぬーでるらんどを奪ひ、更にえじぶとに遠征して英國を苦しめんとせしが、英將ネルソンに破られたり。

頭等統領 英相ピットこれに乘じ、再び大聯合を結びて、



(第二填戰役)

佛國を掩撃せり。ナポレオンまづ理事政府を覆へして頭等統領となり、三軍を發して填國を攻め、らいん左岸の地を得たるのみならず、露國と和を成し、列國と武装中立同盟を結びて、英國海軍の横暴に反抗せり。

皇帝　かくて英國は内政の困難により佛國と和せしかば歐洲姑らく無事なるを得たり。ナポレオンはこの時財政を整理し、法典を編み、一八〇四年には佛國皇帝の位に即き、ナポレオン一世と稱す。佛國にメートル法を採用せしはこの時なり。

(第三回大聯合)
(第三填戰役)

ありすてりつつの戰　已にして英國は和を破り、更に大聯合を結びて佛國に迫れり。ナポレオン一世また填國に侵入し、填露の聯合軍をありすてりつつに破り、伊太利

皇紀二四六六
光格天皇の
朝

皇紀二四六五
光格天皇の
朝

六時間とほ
一海峡の占
領を望め

半島の諸地を取り、獨逸西部諸州をしてらいん同盟を結びてその保護を受けしめたり。されば一八〇六年獨逸皇帝フランシス二世は帝位を辭して奧地利皇帝フランシス一世と稱せり。



ネ
ル
ソ
ン
(牌
念
紀)

とらふゐるがるの海戦 ナポレオン一世は一八〇五年西班牙と同盟し、突然英國に上陸せんことを企てしが、英將ネルソンはその經畫を觀破し、遂にとらふゐるがるに於て佛西兩國の聯合艦隊を全滅し、おのれまたその役に斃れたり。

大陸同盟 さればナポレオン一世は大陸同盟を起して英國との通商を絶ち、以て英國を苦しめんことを企て、まづ

普魯西と争を起してべるりんを陥れ、大陸同盟して英國との交通貿易を遮斷せんことを宣言せり。かくてナポレオン一世はちるしつとに和議を許し、普國をしてえるべ左岸の地を譲らしめ露國をしてゐるしおわ公國を起さしめ、ともに大陸同盟に加入せしめたり。

普國王后ルイザ 普國王フレデリキウィルム三世の後ルイザ賢明なり。あうすてるりつつの戦敗を聞き、幼兒に向ひて復讐を諭し、ちるしつと條約締結に際しては、王を助けてナポレオンを敬服せしめしとぞ。

英國の反抗 英國は佛帝のべるりん宣言を聞き、中立國船舶のナポレオン領に入ることを禁じ、かつ英船の入港を拒む諸港は直ちに封鎖すべきを宣言し、切に國權の維持と

貿易の存續とを圖れり。

びれぬー半島征伐 佛帝は葡萄牙が英國と通ずるを惡み、兵を派して葡王をぶらじるに奔らしめ、また西班牙を并吞せり。西班牙人服せず、英國の援を得て盛に佛國に反抗せり。

大哲學カ
ト詩人ゲ
テ出づ
(第四塊
戰役)



ザイル・アリマ

塊國征伐 獨逸諸邦は西班牙の形勢に鑑み、大に愛國心を振興し、學者また論文を公にして人心を鼓舞せしかば、塊國はまづ起ちて戰を開けり。佛帝兵を以て塊國を破りて和を請はしめ、塊帝の

女マリアルイザを娶り、盛に大陸同盟を勵行せり。

ナポレオンの全盛 ここに至り、ナポレオン一世の領する所南はびれぬー山より、こるしか法王領を包み北は北海に至り、東はらいんゑるべを境していりりあを并せたり。而してその保護を受くるものは、西班牙、葡萄牙、なぼりうゑずとふありあ諸王國、あるしあわ公國、へるべちあ、其共和國及びらいん同盟にして、普、奧、露、并に瑞典、丁抹は皆その同盟に加はれり。されば佛帝の勢威殆ど歐洲の全部に達したりといふべし。

第三章 ナポレオンの衰亡 平和克復

露國征伐 露國は大陸同盟の不利を見、塊國と交通を開

皇紀二四七二年
光緒天皇の
朝
清仁宗時代

さしかば、佛帝は同盟諸國の兵を合せ、一八一二年大舉して露國に入りもすくばを占領せり。然るに露國人は已に都

もすくばに於ける
ナポレオン一世



市を燒きて退却せしかば、佛軍據るに所なく、餓寒凍餒陣營に充ち、また如何ともする能はず、佛帝僅に身を以てばりーに逃れ歸れり。

ナポレオンの流竄
大陸諸國はこの報に接し、また大聯合を結びて佛國を撃てり。佛帝急に大軍を

(第四大聯合)

皇紀二四七四年
光緒天皇の
朝

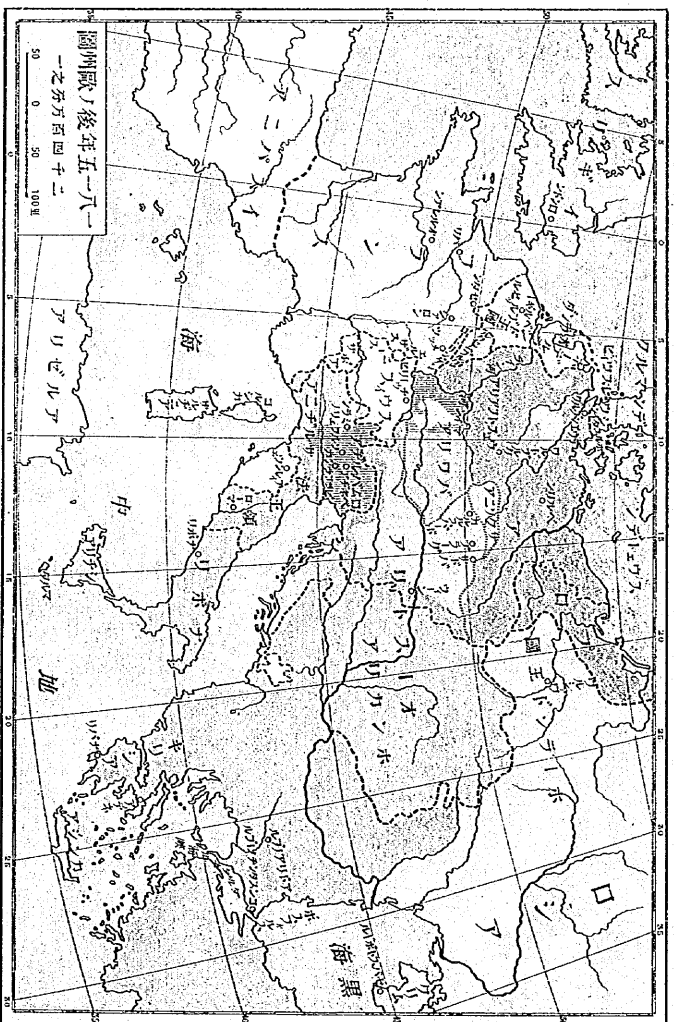
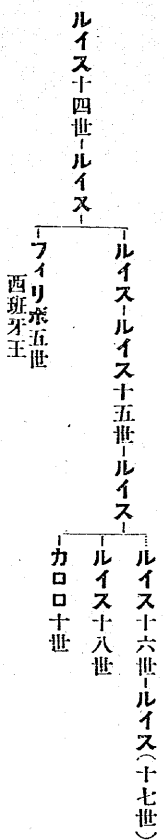
以て獨逸に進撃せしに、らいふちひの大戦に敗れ、舊領同盟殆ど皆離畔せり。されど帝なほ屈せず、媾和の提議を斥けて恢復を圖りしが、聯合軍はばりーを陥れ帝を廢してゑるばに流し、ルイス十八世を立て、和を成せり。

らいーん會議
列國は亂後の處置を議せんとし、一八一四年九月列國の帝王相將相率ゐてらいーんに會し、翌年六月條約を締結せり。これにより、奧國は伊太利の舊領を復し、普國はうゑすとふりあ等を得、獨逸は聯邦となりぬ。而して露國はばりーらんど王國としてゐるし、わ公國の大部を得、瑞典はのるゑーを并せ、英國はまるなを得たり。列國はまた和蘭とねーてゐるらんどを合せてねーてゐるらんど王國を組織し、瑞西西班牙、及び法王領等の獨立を承認せ

皇紀二四七五
年光格天皇の
初

り。

ナポレオンの再起　　ういん會議の未だ終らざるに、ナポレオンは内外形勢の不穩なるを探知し、一八一五年三月えるばを逃れてぱりーに入り、再び皇帝と稱す。列國はナポレオンを以て人類の公敵と認め、英將ウェリントンを總督としてナポレオンの軍をわいてるろーに破り、帝を護送してせんとへれなに流謫せり。ここに於て、列國は再びぱりーに會し、ルイス十八世を復して和議を結び、十二月に至り始めて事局を結べり。



第四章 亞米利加諸國及び希臘の獨立

神聖國盟 一八一五年露帝アレキサンデル一世は、露帝及び普王と議り、ばりに神聖同盟を結び、同盟の諸國は皆



ビニルテツメ

キリスト教を奉じ、内治外交ともに博愛主義によりて互に相援助せんことを約せり。歐洲諸國は漸次率ねこれに加入せり。奧國の相メツテルニヒ最も力を同盟に盡し、言論出版の自由を制限し、同盟の力を協せて各國の立憲自由運動を抑壓せり。

ぶらじゐの獨立 葡萄牙王ジョアン六世本國に歸るや、

ぶらじるは再び舊時の植民政治を受くるを欲せず、太子ペテロを擁して叛旗を挙げ、英國に援助を請へり。英國乃ち葡萄牙に交渉してその獨立を承認せしめたり。

西班牙植民地の獨立　西班牙の植民地もフェルデナン
ド復位の後、その自治制を棄つるに忍びず、ばらぐわい。



大統領モロン

權を獲たり。神聖同盟は植民地を鎮壓せんとせしも、英國

るぐわいまづ獨立し、べぬずえら
ぼりびあちれめきしと等また獨
立を稱せり。英國は各國の任意
政治を唱へ、自由貿易論の實行を
期したりし、かば植民地に聲援し
てその目的を達せしめ、貿易の利

モ書に、教米利加國のては、
亞米利加國の處を以て
自處を理すべしと云ふ
問く米國が政治が
歐洲の政にせざらば
歐洲の諸國には
歐洲の諸國に干渉の
問題に於けることを
するに与へずと宣
言せり。

の海軍に對抗し得ざるのみならず、米國大統領モンローまた歐洲諸國の干涉を許さざりしかば、遂に如何ともする能はざりき。

希臘の獨立　この頃希臘はキリスト教を奉じ、露國の後援を恃みて土耳其に叛き、獨立を唱ふ。土耳其帝はえじぶと藩王に命じてこれを討ち、あてぬを陥れたり。メッテルニヒは露國に抗議して希臘を援ふこと能はざらしめしが、希臘が列國の同情に訴へ、救援を要むるに及び、露帝ニコライ一世は遂にメッテルニヒの抗議を斥け、英佛二國を誘ひて、一八二七年、えじぶとの艦隊をなばりのに破れり。神聖同盟はここに至りて破綻せり。已にして露軍あどりあのおるを陥るに及び、一八二九年遂にあどりあのおる條約を

皇紀二四八七年
仁孝天皇の
朝

清高宗時代

皇紀二四八九年
存仁天皇の
朝

結び、希臘の獨立を承認せり。露英佛三國はばわりあの子オトーを立てゝぎりしあ王位に即かしめき。

第五章 佛國の政變とナポレオン三世

七月革命 佛國は王政復古の後ち、ルイス十八世、カロロ十世相ついで位につく。カロロ十世は貴族敎正を庇護して人民の自由を束縛し、ポリニアクを相とし、議會に臨みて王權の神聖を説き、これに反對したる議會を解散したるのみならず、一八三〇年七月には勅令を發布して未だ開會せざる議會を解散し、選舉法を改め、言論出版の自由を束縛するに至りしかば、人民はその非法を憤りて亂を作し、チエール等の徒は王を廢しておるれあん公、ルイス、フィリポを迎へて王とせり。これを七月革命といふ。

皇紀二四九〇年
孝天皇の御
清宣宗時代

へて王とせり。これを七月革命といふ。

二月革命 佛王ルイス、フィリポは寛裕の政令を施きしが、勞動者は革命遂行の報酬として政權を得んことを迫り、ナポレオン黨はナポレオン一世の偉業を追懷して、王政に反對せしかば、チエール内閣仆れて、ギゾー内閣を組織せり。然れども、ギゾーは選舉權を勞動者に附與するの不可を唱へて、これを與へざりしかば、反對黨は、一八四七年、革新宴會を開きて、七月革命の紀念式を挙げ、民權擴張、職工保護を迫り。然るにギゾーはなほもこれを顧みず、治安妨害の故を以て、その再び開かんとする宴會を禁止するに至りしかば、一八四八年二月、騒動ばりーに起りて王軍を破り、王及び王族は難を英國に避けたり。これを二月革命といふ。共

皇紀二五〇八
年孝明天皇
嘉永元年
清宣宗時代

和黨假政府を立て、労働者はばりて調歩せり。
共和政治成る 假政府は新選舉法を定め國民議會を開
き、佛國の共和政治たるべきを宣言し、また労働者の爲めに
新設せられたる大工場を閉鎖し、カベイニアクは悉く労働
者の暴動を鎮壓せり。國民議會は憲法を定め、四年の任期
を以て大統領を置くことを定めたり。

ナポレオンの出世 この時ナポレオン一世の甥ルイス



(世三)ンオレボナ

ナポレオンは選ばれて議員たり。國
威の宣揚と労働者保護等を唱へて地
方の人士を遊説し、遂に大統領に擧げ
られたり。ナポレオン乃ち法王領の
騒動を平げて武威を發揚し、地方の人

皇紀二五一
年孝明天皇
永四年
清文宗時代

舉國投票の
結果は如何
なることも
爲し得べし
とはナポレ
オンの主義
なり。

民を慰撫して憲法改正を請願せしめ、一八五一年警察と兵
力とによりて國會を解散し、反對黨を捕縛し新憲法を公に
して舉國投票を求め、人民多數の賛助承認により、遂に十年
間の大統領となれり。ついで翌年、更に人民の請願により
て帝位につき、ナポレオン三世と稱ず。かくて自由を主と
せる共和政は一變して帝政となりぬ。

ナポレオン三世の策 ナポレオン三世は舊教徒及び軍
人の後援によりて帝位に上るを得たり。故に帝は伯父ナ
ポレオン一世の偉業に則り、大に武威を擧げて、以て帝室の
安固を圖るを期せり。

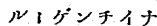
東歐の事變 時に露國は近隣諸國と親交を結び、大に東
歐に利を占めんと欲し、土耳其帝國を目するに大病人を以

皇紀二五一四
年孝明天皇
安政元年
清文宗時代

皇紀二五一五
年孝明天皇
安政二年

皇紀二五一六年
孝明天皇
安政三年

皇紀二五一九
年孝明天皇
安政六年



新編女子西洋史

佛帝の偉業 佛帝は戰勝の餘威を以てめきしを占領し、さいごんを取り、南清に商權を擴張し、伊太利統一に努力せり。そのめきしと遠征は效果なかりしも、佛帝國の名聲は大に中外に宣揚せられたり。

第六章 伊太利の統一

伊太利の自由運動 伊太利人は、佛國革命に際し、一旦自由を享有せしかば、ウィーン會議の後、佛國の壓制を受くるを喜ばず、屢、叛亂を起して自由を得んとせしも、毎にその目的を遂げざりき。

さるぢにあの希圖 さるぢにあは夙に立憲自由を唱へて人心を收攬し、伊太利諸市を統一せんことを圖り、王ビク



伯ルイブルカ

トリオエマヌエロ二世はカブールを登庸し、くりむの役に

英佛を援けて、私に高利を他日に

得んことを期したり。

そるふえりの戰 くりむ戰

役の結果、佛國の地位危くなりし

に乘じ、カブールはナポレオン三

世を要して、祕密同盟を結ばしめ、佛國を刺戟して戰を宣せ

しむ。佛帝マクマホンを將としてさるぢにあを援はしむ。

ここに於て兩國同盟軍は佛軍をそるふえりのに潰しぬ。

講和 佛帝は佛國が窮困の極、普魯西と聯合せんことを

憂ひ、この奇勝に乘じて、佛帝フランシス、ヨセフとびらふら

んかに會して和議を整へ、更にちりひに於て佛國及び

さるぢにあと會し、さるぢにあをしてるむばるぢあを得しめ、伊太利同盟を作りて法王を盟主とすべきを約して和を結べり。

さるぢにあの強大　伊太利にある諸小邦はこれに従はず、陸續としてさるぢにあに合併せり。さるぢにあは、一すさぼや二州を佛國に譲り、その承認を得たり。伊太利民主黨の首領ガリバルヂは義勇兵を率ゐて、しちりあ、なぼりを降して歸順し、悉く侵地をさるぢにあに獻ぜり。

伊太利の建國　さればビクトリオ・エマヌエロ二世は一八六一年伊太利王と稱し、ふいれんつゑに都せり。伊太利領たらざるもの、半島に羅馬法王領とべねちあとのみ。ナポレオン三世は羅馬に守備兵を置きて勢威を振へり。

皇紀二五二
年孝明天皇
文久元年
清文宗時代

第七章　獨逸の一統

普魯西の企圖　獨逸はメッテルニヒ退職後、各邦憲法を定めて自由を得しも、その統一に至りては普墺兩國互角の勢を以て相對立せるあるを以て、未だこれが解決を見るに至らざりき。普王ウィルヘルム一世は夙に蓋世の志を抱き、



クルマスピ

盛に兵備を修め、一八六一年ビスマルクを擧げて相たらしむ。ビスマルク經世の英資を以てこれを輔佐し、鐵と血により、その目的を達せんことを期したり。

しうれすういひ問題　丁抹は王位相續の問題により獨逸聯邦と久しく紛議を重ねたりしが、王キリスチアン九世新憲法を發布してしうれすういひ州を丁抹に合併するに及び、獨逸聯邦はこれを不法とし兵を發して丁抹を討てり。ビスマルクは塙國と議り、ともに兵を出してしうれすういひほるすたいんらうえんぶるぐの三州を占領してこれを獨逸に割讓せしめたり。

普塙の衝突　かくて塙國は三州を以てアウグステンブルグ公に與へんことを唱へしに、ビスマルクはこれを聽かず、塙國に嚴談してらうえんぶるぐを購求ししうれすういひほるすたいん二州を塙國とともに分領せんことを約せり。然るに二州は分離を欲せざりしかば、ビスマルクはこ

皇紀二五二六
年孝明天皇
慶應二年

皇紀二五二七
年孝明天皇
慶應三年

れを以て塙國の教唆によるものと稱して、塙國に難詰せり。ビスマルクは佛帝ナポレオン三世に請ひ、その斡旋によりて、普伊同盟を締結するや、ビスマルクは遂に塙國を以て獨逸の平和を危くするものなりと論じ、獨逸統一の必要を唱へて兵を動かせり。

さどばの戦　一八六六年ウイレルム一世はモルトケを伴なひ、塙軍をさどばに破りて、ういーんを圍み、伊軍は北進して塙國に侵入せり。佛帝形勢の容易ならざるを見、その間に斡旋して休戦せしめたり。

獨逸の改造　ここに於て普塙兩國はぶらうぐに條約を結び、(一八六七年)普國は二州及びさきそほあ等を領し、まいん河北に北獨逸聯邦を組織し、塙國を聯邦より除外せり。而

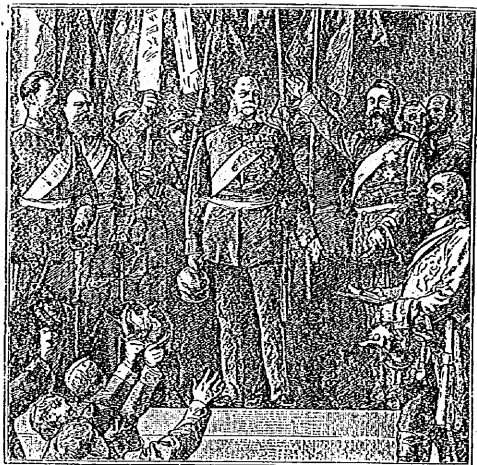
皇紀二五三〇
年
明治三年

して伊太利は奥國とウィーンに盟ひてベネチアを得たり。
普佛の葛藤 然るにビスマルクは戦捷の後、佛帝の勞
に酬ひざるのみならず、佛帝が和蘭と約して、そのるくせん
ぶるぐを購求せんとするや、ビスマルクは列國をろんどん
に會し、これを中立地と確定せり。會、西班牙女王政を失し
て國內亂れ、佛國に走りて援を求むるや、西班牙議會は普王
の一族レオポルドを迎へんことを決せり。佛帝これを聞
き、普王に嚴談してこれを禁せんことを要め、レオポルド辭
退の後も、普王が將來これに與らざるべきを保證せんこと
をもとめたり。普王これを拒絶せり。ここに於て佛國は
戰を宣せり。(一八七〇年)

佛帝の降服 普王は參謀長モルトケとともに、三軍を率

ゐて連りに佛軍を破り、佛帝をせだんに虜にしめつつを陷
れ、パリを圍めり。

皇紀二五三一
年
明治四年



どいつ帝國の宣言

べるさいゆ條約 佛
國力竭きて和を乞ひ、一
八七一年チエールはベ
るさいゆにビスマルク
と會し、えるざすとり
とりんげんの二州を獨
逸に譲り、五十億フラン
の償金を約して局を結
べり。

獨逸伊太利統一成る 普王のべるさいゆにあるや獨逸

の諸王公相議して、帝國の建設を宣言し、普王をして帝位に即かしむ。ついてべるりに憲法を定め、普王は世襲を以て帝位を踐み、各州の内政はこれを各州に委ねたり。伊太利はこの戦役に乘じ、法王領を奪ひて統一の業を成就し、都をローマに奠めたり。

西班牙平定　西班牙はその後ち紛擾を重ねしが、一八七四年イサベラの第二子アルフォンソ王位に即けり。佛國の共和　佛國にてはべるさいゆ條約を喜ばざるもの騒動を起せしが、マクマホンは兵力を以てこれを平げ、チエールは銳意治を圖りて償金を皆済せり。一八七五年マクマホン共和國憲法を制定し、大統領を置き、任期を七年とし、選ばれて大統領となる。これより佛國再び盛なり。

皇紀二五三五
明治八年

第八章　露土戦争

普佛戦後の形勢　普佛戦争の後ち、佛國は常に獨逸を疾みしかば、獨逸は露伊兩國と親しみ、また埃國と親しみて、専らこれが備を爲せり。露國はこの機に乘じて東歐羅巴に利を占めんことを怠らざりき。

戦争の源因　一八七五年へるせごびな土耳其に叛き、もゐてねぐろせるびあほすにあこれに應ずるに及び、露相ブルチャコフは獨埃兩國とともに内政改革を土耳其に勸告し、英國も特に土耳其を扶掖せり。然るに會ぶるがりあ人また叛して虐殺せらるゝに及び、露國はキリスト教徒スラブ種族保護を名としてせるびあを援助せり。この時英國

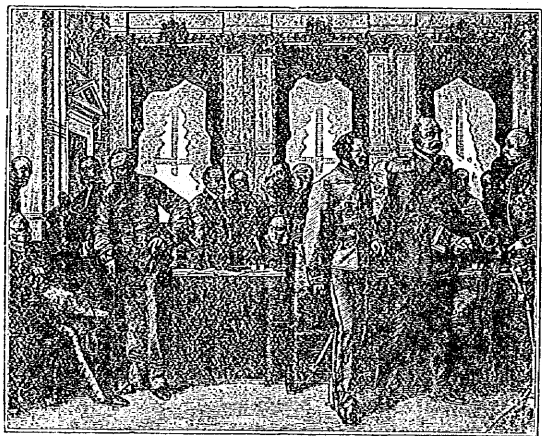
皇紀二五三七
明治六年

皇紀二五二八
明治一年

は頻りに内政改革を土耳其に迫りしも、土耳其は言を左右にして改革を斷行するに至らず。かくて露國は遂に、せるびあの獨立を唱へて戰を開けり。

戰鬭 一八八七年露國は大軍を發して土耳其を侵し、諸處に土耳其軍を破れり。土耳其は内憂外患に苦しみ大に窮迫せり。英國はその窮情を見るに忍びず、露土兩國に説きて遂にさんずてふあのに和を議するに至らしめたり。べるりん條約 然るに和約成るや、英國は露國の利する所大に過ぐるを認めてこれを非認し、艦隊を派して海峽を扼せしめ、砲煙將に東歐の天を蔽はんとせしが、一八七八年べるりん列國會議を開きて遂に和を成せり。これをべるりん條約といふ。これにより土國はふるがりあを附屬

國とし、束るめりあに自治制を許し、せるびあもんでぬぐる



議 會 國 列 ン リ ル ベ

の獨立を認め、また國內の信教自由を公許せり。加之、土國は露國にかかるすばつむを譲り、埃國にはぼすにあへるぜどびなを與へ、希臘にはてさりあを割き、英國にはきふるすを領有せしめたり。土國の勢ここに至り益々縮少せり。

第九章 西洋諸國の形勢

三國同盟 普國がべるりん條約締結に當りて大に露國の利益を抑制したるは、露國の怒を招きし所なり。さればビスマルクは奥國を招きて防禦同盟を結び以てこれが備をなしき。佛國がちうはすを征服し、伊太利が危懼を抱けるを見るや、ビスマルクはまた伊太利を招き、一八八三年ここに三國の防禦同盟を組織し、爾來益々好意を以てこれを繼續せり。

二國聯合 然れどもビスマルクは露國と戦ふの不利なるを認め、常に露國帝室に好意を表せしかば、露佛の間未だ接近するに至らざりき。一八八八年ウィルヘルム一世歿す

皇紀二五四三年
明治一六三年皇紀二五四八年
明治二一年八
皇紀二五五年
明治二八年五

るに及び、露國は漸く佛國と相親しみ、一八九五年遂に聯合を結びぬ。

英國の位置 英國は第十九世紀の初より、自由貿易各國任意制度の主義により、大に貿易を振興し、植民地を開拓し、内には財政を整理し、選舉を公平にし、あいるらんの政治を改良して富強の實力を有せり。三國同盟、二國聯合の成るや、英國は強大なる海軍を擁して、久しく名譽の中立を維持せしが、露國の東方經營歩を進むるに及び、わが國と同盟を締結して極東の平和を謀るに至れり。

土耳其希臘の役 はじめ希臘の獨立するや、ギリシア教を奉ぜられて島は大に希臘に同情して盡す所ありしが、希臘は獨立せしも、くれては依然土耳其領に歸し、毎に自由

皇紀二五五六年
明治二九年

を得ざるを憾とせり。一八九五年土耳其は多くくれて島民及びあるめにあ人を殺せり。列國これに抗議せしが、速かに改善を見る能はざりき。希臘人は同情の念禁ずる能はず、遂に一八九六年土耳其と戦を開き、くれてを併せ、えびるすを得んことを期せしが、却つて大敗しててっさりあを割き、償金を出して和せり。

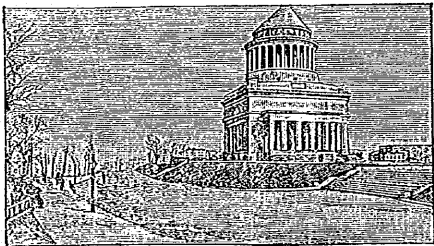
露國の改革 露國は列國の趨勢に反し、久しく祖宗の法によりて君主專制の制度を維持し、これによりてよく國力を振張し來りしが、人民はその壓抑を厭ひ、或は立憲自由の必要を論じ、或は過激なる秘密結社を爲して皇帝貴族等を殺さんとするものさへありき。日露戰役起り、露國の陸海軍連敗するに及び諸處に同盟罷業等起り、遂に軍艦の叛く

ものあるに至りしかば、露帝は決然祖宗の法を改め、憲法を定め、國會を開き、上下一致戰後の經營に従事し、漸次内外政務の改革をなしたり。

諸威の獨立 諸威スウェーデンは瑞典と合併し來りしが、日露戰役當時諸威議會は分離獨立を決議して瑞典の承認を得、一九〇五年遂に獨立王國となりぬ。

米國の發展 合衆國は、獨立以來驟々として繁榮に赴き、るいじあなを佛國より購ひ、ふろりだを西班牙より求め、その領土また大に擴張せり。適てきさすがめきしこより分離して合衆國に加入を請ふに及び、めきしここれを聽かざりしかば、合衆國はめきしこと戦ひ、上かりふおるにあにうーめきしこを割讓せしめたり。かく南部の地益増加する

皇紀二五二〇
萬曆元年
明神宗時代



墓 墳 の 軍 將 ド ン ラ グ

皇紀二五二五
慶應元年
清文宗時代

に及び、奴隸問題は國內に沸騰し、北部諸州は奴隸を以て天理に悖るものなりと論じ、南部は奴隸を使役するの必要を唱へ、兩者の意見相衝突せしが、一八六〇年アブラハム・リンカーン大統領たるに及び、南部十一州はこれを奉ずるを欲せず、遂にあめりか聯邦を建て、合衆國と抗爭するに至れり。然るに一八六三年リンカーン奴隸解放令を發布してより、北軍益々振ひける上に、北軍の將グラントより南部を攻撃せしかば、一八六五年南部の都りっちもんど陥り、あめりか聯邦解散して局を結び、之より米國の勢力益々

盛にして、遂に覇圖を大陸以外に及ぼさんとするに至れり

第十章 亞細亞亞弗利加大洋洲に於ける

歐米諸國の經營

露西亞の南進 露西亞はナポレオン戰役の後、漸く南下の勢を示し、べるしあよりかふかづを奪ひ、べるしあ及びあふがほすたんに出て、商權を擴張せり。加之露國はまたとるきすたんを占領し、ぶからを保護とし、きぼーかんどを并せ、一八八四年にはめるぶを略有し、更にばみーるを窺はんとす。

英國の印度經略 英國東印度會社は西北に進みて、ふんじあぶ地方を平げてあふがほすたんに露國と商戰を開け

皇紀二五四四
明治二年

嘉徳二五四六
年
明治一九年

り。加之、英國はばるまと戦を開き、印度土兵の叛亂を鎮定し、遂に印度を英國政府の直轄と定め、一八八六年には悉くばるまを略有せり。

中央亞細亞に於ける英露交渉 英國は露國の南進を以

皇徳二五四七
年
明治二〇年



帝女アリトクビ

て印度を危くするものとし、遂に一八八七年あふがほすたんと中立地と定め、一八九五年にはばみーるに境界を定めて局を結べり。

西清に於ける英露 清國に

回部の亂あるや、露國は兵を伊犁に出してこれを占領し、媾和の後、遂にはるごーす河西を露領と確定せり。加之、露

皇徳二五六四
年
明治三七年

國は西藏の噍囉喇嘛の歡心を得て大に爲すあらんとせしが、一九〇四年英國は露國の多事なるに乗じて、西藏に遠征し、清國と約して西藏の清領たるを確認せり。

東南清に於ける英露 英國は印度より阿片を清國に輸

皇徳二五〇二
年
天保三年
清宣宗時代

入して清國と葛藤を生じ、一八四二年南京條約によりて香港を割讓せしめ、清國の五港を開けり。已にして清國が長髮賊の亂に苦しめるに當り、英國は再び清國と軋轢を生じ、佛帝ナポレオン三世の協力を得て、清國を攻撃し、北京を陥れ、一八六〇年北京條約を結びて益々南清に商權を確立せり。而して露國も清國の困難に乘じ、一八五八年愛琿に條約を結びて黒龍江左岸を得、更に北京條約締結に斡旋したるの報酬として烏蘇里江右岸の地を得、ここにうらぢぼすとく

皇徳二五二〇
年
萬曆元年
清文宗時代
皇徳二五二八
年
安政五年

を建てて極東貿易の要津と定めたり。

満洲についての英露 露國が極東經營を企てつゝある時に當り、會一八九四年日清兩國兵を交え、翌年遂に馬關條約を結びて和を成し、わが國は遼東半島及び臺灣澎湖列島を得ることとなれり。露國は深くこれを憂ひ、遂に獨佛兩國を誘ひ、わが國に勸告して遼東半島を還附せしめ、清國に要求して滿洲鐵道敷設權を得たり。^(一八九六年)その後更に清國に迫りて旅順口と大連灣とを二十五ヶ年間租借せり。^(一九〇九年)ここに於てしべりあ鐵道は滿洲を貫きてうらちばずとくに達し、はるびんより支線を以て旅順口に出て、露國極東の經營大に發展せり。已にして義和團の變亂北清に起れり。露國は兵を出して、北京の攻守に任ずると同時に、鐵道

皇紀二五五四
明治三十七年

皇紀二五五六
明治三十九年

皇紀二五五九
明治三十二年

皇紀二五六〇
明治三十三年

皇紀二五六二
明治三十五年

皇紀二五六四
明治三十七年

保護を名として、滿洲を占領し、^(一九〇九年)秩序回復の後ちも言を左右に託して兵を撤せざりき。英國は威海衛を租借して北清に於ける勢力の均勢を維持せんとせしが、ここに至りて日本と攻守同盟を結び、^(一九〇三年)清韓兩國の保全と東洋平和とを圖れり。

日露の衝突 露國が滿洲撤兵を宣しながら、これを實行せざるのみならず漸く韓國を威壓し、誠意を以て日本の平和的商議に應ぜず、汲々として極東の戰備をつとめ、遂に日本と一大衝突を起せり。^(一九〇四年)然るに戰鬪は連戰連敗し、旅順口は陥り、陸軍は奉天に潰走し、海軍は旅順口・日本海に前後殆ど全滅せり。ここに於て兩國はぼつまずに會して和を議し、露國は日本の韓國宗主權を認め、樺太島北緯五十

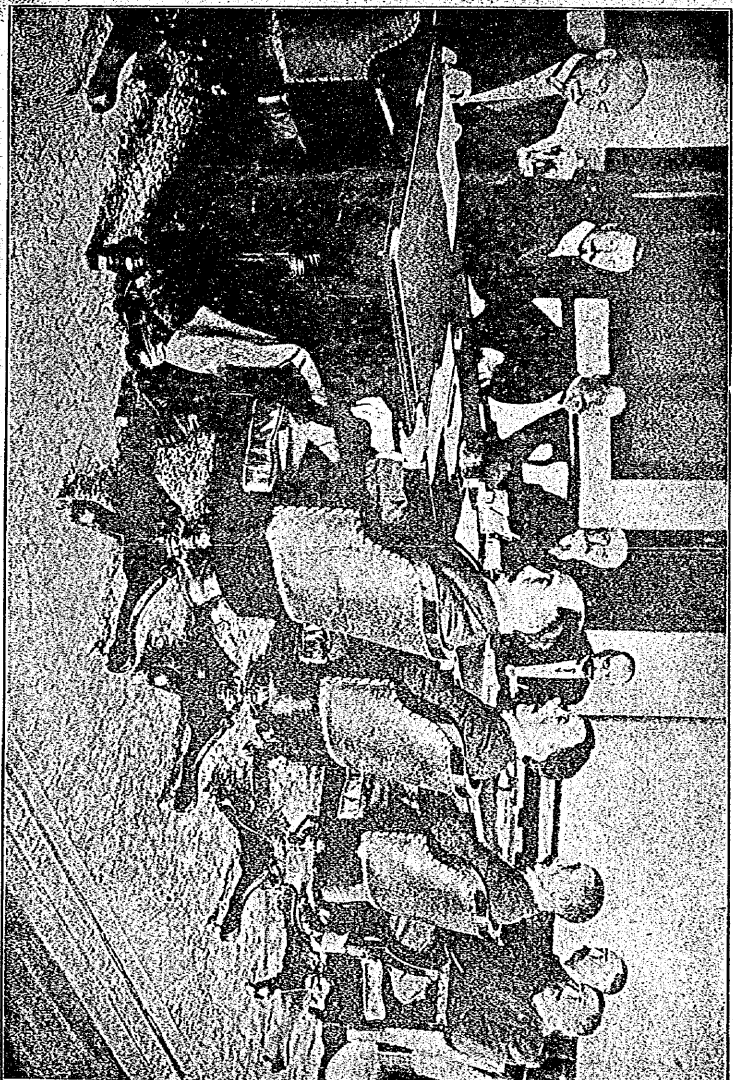
度以南の地を割き、滿洲に於ける長春以南の利益を譲れり。これによりて露國極東の大經畫は一頓挫を致ししも、うらぶぼずとくは嚴存し、しべりあ鐵道は益々完全せり。されば露國は日本と協商を結び、協同して清國の領土保全并に相互の利益を確保せり。

皇紀二五四一
明治四年

えじぶとと英國 英國はえじぶとの財政困難に乗じ、ずえず運河の株券を買收し、佛國委員とともに財政を管理せしが、えじぶとに内亂起るに及び、これを討ちて、獨りえじぶとに勢力を振へり。(二年八)

亞弗利加の經營 亞弗利加の内地は久しく暗黒大陸として放棄せられしが、第十九世紀の中頃、リビングストン、スタンリー等の探検より漸く列國の耳目を聳動し、今や英佛

國の列談和議るひ於に、すまのーは國衆合かうめわ



右中央日本全權委員 小村男

左中央るしる全權委員 小村男

獨伊井に白耳義・西班牙・葡萄牙等に分割せられ、その制御を受けざるもの僅かにもろつて外數地あるのみ。

英國の南弗經營 就中英國は最も優勢を占め、さきに和蘭よりけーぷ植民地を得、更に北進して南亞弗利加共和國、おらんいゑ自由國に勢力を振ひけるが、南亞弗利加共和國に採金業盛なるに及び、南亞弗利加共和國と葛藤を起し、一八九九年戰端を開けり。南亞弗利加共和國はおらんいゑ共和國と同盟してこれに抗し、苦戰甚だつとめしが、一九〇二年遂に英國に屈從せり。この役米國は英國に同情すること深かりしかば、兩國間の交情益々厚きを加へぬ。

大洋洲に於ける英國 太平洋方面にありては、英人クック、豪洲及びニュージーランドを精査し、ぼるねおの一部を領

皇紀二五五九年
明治三二年

皇紀二五六二年
明治三五年

皇紀二五二三
年孝明天皇
文久二年

皇紀二五四五
年明治八年

皇紀二五五五
年明治二八年

皇紀二五五九
年明治三二年

し、以て東洋・南洋に航するの便を開きぬ。濠洲の植民地は爾來益々發達して、遂に聯合憲法を發布するに至れり。(一九〇〇年)

亞細亞に於ける佛國 佛國は已に南清に商權を擴張し、大に越南建國に盡力せしが、その報酬を得ざるに及び、遂に越南を討ちて交趾支那を得。(一八八六二年) ついてかむぼぢやをその保護國となしぬ。已にして佛國はまた越南と不和を生じて國都を陥れ、東京地方を略し、越南をして佛國の保護を受けるを約せしめ、清國と戦ひてこれを承認せしめたり。(一八八五年) ここに於て佛國はめーこん河東を占領して暹羅に迫り、馬關條約干涉の後、清國に迫りて、兩廣雲南の鑛山採掘權を得。(一八八九年) ついて廣州灣を租借し。(一八八九年) 益々後印度より南清に勢力を發展せり。日露戰役の後、日本と協約を

皇紀二五六五
年明治三八年

皇紀二五七一
年明治四年

結び、清國の領土保全を約し、その利益を維持せり。

英佛協約 英佛兩國が亞細亞・亞弗利加大洋洲等に植民貿易政策を發展するに及び、兩國の間、往々利益の衝突を生じ、紛議を起すことありしかば、一九〇五年協約を結びてこれを一掃せり。

獨逸の經營 獨逸は亞弗利加に植民地を開き、ほろーぎにあの一部及びびずまるく群島を占領し、清國より膠州灣を租借して、東洋貿易の基礎を定め、日露の戰役の頃、もろっこに利權を得んとして、英佛協商の輕重を問ひ、益々海軍を擴張して大に爲すあらんとせしが、後、一九一一年佛國のもろっこに於ける優越權を認めて、かめるん河邊に領土を得べきを約せり。

皇紀二五五三年
明治二六年
皇紀二五五七年
明治三〇年

米國のはわい併合 米國は從來モンロー主義を固執せしが、はわいの革命(一八九三年)を助けて共和政治を建設せしめ、遂にはわいの請を容れてこれを合併せり。(一八九七年)

皇紀二五五八年
明治三二年

米西戦争 加之、きりば島民が西班牙に叛くに及び、米國は爲めに改革を西班牙に勧告し、その聽かれざるや、(一八九八年)直ちに戦端を開きて、西班牙の海陸軍を破り、ばりーの媾和條約により、ふりっびん群島及びぼるとりこを得、きりばの獨立を承認せしめたり。

米國の政策 かくモンロー主義は一變して世界政策となり、ばなまを獨立せしめてこれと運河開鑿條約を結び、大に海軍を擴張して勢力の發展につとめ、また清國に商權を張らんことをつとめ、わが國と覺書を交換してその利益を

維持せんとす。

第十一章 最近文明の進歩

文學・史學 西洋の文明は第十八世紀末より長足の進歩を爲し、文學には實際を寫すの妙を究め、獨逸のゲーテ、佛蘭西のユーゴー、英吉利のテニスン等大家と稱せらる。史學には獨逸人ランケを泰斗とし、獨逸人モムゼン、英吉利人フリーマン等その名高し。

哲學 哲學には獨逸人カント認識論を説きて一世を啓發し、ついでヘーゲル、ハルトマン、英人スペンサー等各一家の説を立て、深奥の原理を説けり。

科學 天文・數學・物理・化學・博物等の科學もまた長足の進

歩を爲し、が、獨逸人マイエルは勢力不滅説を唱へ、英人ダーウィンは進化論を説けり。實に古今の卓論とす。その他、顯微鏡、望遠鏡、寫眞術の發達は科學、技藝の發達を促がすこと多く、接種、注射、血清等醫療法の發明は、回生救民の大事業なりとす。

蒸氣機關 蒸氣の應用に至りては、第十八世紀の末、英人ワット完全なる蒸氣機關を發明せしかば、漸次これを各種の製造に應用せられ、生産力に著しき發達を成さしめたり。

汽車、汽船 米人フルトンは蒸氣機關を船舶に應用し、汽船を製せり。また英人トリブシツクは第十九世紀の初め、蒸氣機關車を發明せしが、スチブンスンはこれを改良し、一八二九年始めてりば、一ふーるとまunchとす。なーとの間に

運轉せり。これ等は、自轉車、自動車の發明とともに世界の交通系に一大變化を與へたり。

電氣の應用 獨逸人センメリング電氣を利用して通信を試みしが、一八三三年ガウスは電磁氣を利用してこれを實用に供し、ついで米人モース等これを改良して廣く用ゐらるゝに至れり。海底電線は一八五〇年英・佛兩國の間に始めて敷設せられ、米人グレハム・ベルは電話を大成せり。その他電燈、電車、無線電信等有益なる發明少なからず。

武器 兵器、戰術も從つて大に進歩し、後裝連發銃、速射砲、爆裂彈、無煙火藥等相ついて發明せられ、堅牢なる甲鐵艦及びこれを粉碎すべき水雷、潛行水雷艇も發明せられ、今や軍用輕氣球、飛行船、飛行機の研究中に屬す。

經濟の發達 電信・電話の發明、汽車・汽船の利用は商業の便利と安全とを致し、各種保險の發達、信用取引の進歩は益々世界貿易の増進を促かし、ことに南亞弗利加等に金の產出激増せしは貨幣制度の改善を促かし、經濟上の利便少ならざりき。すえずきゝる兩運河の開鑿、あまりかしべりあ兩大鐵道の完成は益々東西の交通運搬を頻繁ならしめ、世界貿易の總額は第十九世紀の初めに比して數十倍の多きに達せり。列國は各分業の主義により、各種の蒸氣機關を利用して製造工業を興し、有無相通じて益々國力の富裕を圖れり。故を以て一方には益々軍備の擴張を圖るとともに益々平和保障を確立せんことを期せり。

宗教の情況 歐洲に於ける自由統一論は今や率ね解決

せられ、殆ど紛紜を生ずる憂なく、信教の自由も公認せられて、教の異同を問はざるものの如く、羅馬法王の如きは漸く政治外に超絶し、宗教と教育とは漸次分離するに至れり。社會の情況 經濟の發達に伴ひ、貧富の別漸く著しく、勞働者は團を成して資本家に賃銀の値上げを要求し、社會主義無政府主義の如き危険思想はことに獨逸・伊太利露西亞等に蔓延し、陰に帝王を暗殺し、社會の秩序を破壊せんとするもあり。

共同博愛事業 然れども國際の關係密接し、交通往來益々頻繁となるに及び、共同博愛の事業も盛に起れり。萬國博覽會は屢開設せられ、郵便・電信・商標・版權の同盟も起り、衛生・監獄その他學術の聯合會も諸所に開かれたり。慈善病院

孤兒院、養育院等諸國に設けられぬ。一八七〇年には赤十字社同盟成り、ついでこれを海戰に及ぼすことを定めたり。萬國平和會議 一八九九年露帝は發議してヘーグに萬國平和會議を開き、仲裁裁判所を設けて國際紛議の裁決を依頼するを得しめたり。爾來列國は各種の協約を結びて兵亂の禍害を避けんことを企て遂に英・米兩國間には總括的仲裁條約締結を見んとするに至れり。(一九一二年)

明治四四年

新編女子西洋史 終

西洋史大事年表

西曆	皇	曆	支	那	事	蹟
紀元前 凡一七〇〇						えじふとの開化起る
凡一六五〇						えじふとの隆盛
凡一三二〇						モーゼヘブライを率ゐてえじふとを去る
九五三						ヘブライ、いすらえるとゆだやとに分裂す
六〇六	五五		東周定王	元		あつしりあ國滅ぶ
五二五	一三六		東周景王	二九		べるしあの一統
四二九	二二二		東周孝王	一二		ベリクレス歿す
三九九	二六二		東周安王	三		ソクラテス歿す
三三一	三三〇		東周顯王	三八		べるしあ滅ぶ
三二三	三三八		東周顯王	四六		アレクサンドル大王歿す
二八〇	三八一		東周赧王	三五		羅馬海外征討を擧む

西洋史大事年表

一三三	五二八	漢武帝元光	三	羅馬多く海外に土地を得
四四	六一七	後漢元帝初元	五	ケーザル歿す
二七	六三四	後漢成帝河平	二	羅馬帝政となる
紀元 三二三	九八三	東晉明帝大寧	元	キリスト教羅馬の國教となる
四七六	一一三六	宋廢帝元徽	三	西羅馬帝國亡ぶ
六二二	一二八二	唐高祖武德	五	ムハメッドめぢなほに逃る
六四一	一三〇一	唐太宗貞觀	一五	べるしあ國亡ぶ
八〇〇	一四六一	唐德宗貞元	一六	カロロ大帝即位す
八二七	一四八七	唐文宗太和	元	エクベルト英國を定む
八八七	一五五七	唐僖宗光啓	三	獨逸國起る
九六二	一六二二	宋太祖建隆	三	神聖羅馬帝國成る
九八七	一六四七	宋太宗雍熙	四	佛蘭西國起る
一〇七七	一七三七	宋神宗熙寧	一〇	法王皇帝を服従せしむ
一〇九六	一七五六	宋哲宗紹聖	三	第一十字軍起る
一二一五	一八七五	宋寧宗嘉定	八	英國憲法成る
		順德天皇建保	三	
		堀河天皇永長	元	
		白河天皇承暦	元	
		一條天皇永延	元	
		村上天皇應和	二	
		光孝天皇仁和	三	
		淳和天皇天長	四	
		桓武天皇延暦	一九	
		舒明天皇	一三	
		推古天皇	三〇	

一二六五	一九二五	龜山天皇文永	二	南宋度宗咸淳	元	英國議會成る
一二七〇	一九三〇	龜山天皇文永	七	南宋度宗咸淳	六	第七十字軍終る
一三〇九	一九六九	花園天皇延慶	二	南宋武宗至大	二	法王あびにんに遷さる
一三四六	二〇〇六	後村上天皇正平	元	元順帝至正	六	くれしーの戦、火器始めて用ゐらる
一四三六	二〇九六	後花園天皇永享	八	明英宗正統	元	活版印刷術起る
一四五三	二一一三	後花園天皇享徳	二	明景宗景泰	四	英佛百年の戦終る 東羅馬帝國滅ぶ
一四八六	二二四六	後土御門天皇文明	一八	明憲宗成化	二二	喜望崎發見
一四九八	二二五八	後土御門天皇明應	七	明孝宗弘治	一一	葡萄牙船印度に達す
一五一〇	二二七〇	後柏原天皇永止	八	明武宗正徳	六	葡萄牙ごあを開く
一五一七	二二七七	後柏原天皇永正	一四	明武宗正徳	二二	ルーテル宗教改革論を唱ふ
一五一九	二二七九	後柏原天皇永正	一六	明武宗正徳	一四	らおるむすの會議
一五二一	二二八一	後柏原天皇大永	元	明武宗正徳	一六	世界一週を了る
一五二九	二二八八	後奈良天皇享祿	二	明世宗嘉靖	八	新教確立す
一五四〇	二二〇〇	後奈良天皇天文	九	明世宗嘉靖	一九	イエスイタ社起る
一五四五	二二〇五	後奈良天皇天文	一四	明世宗嘉靖	二四	とれんと會議

西洋史大事年表

四

一五五五	二二一五	後奈良天皇弘徳	元	明世宗嘉靖	三四	おーぐずぶるど宗教講和成る
一五六二	二二二二	正親町天皇永祿	五	明世宗嘉靖	四一	西班牙呂宋を占領す
一五八一	二二四一	正親町天皇天正	九	明神宗萬曆	九	和蘭獨立の宣言
一五八八	二二四八	後陽成天皇天正	一六	明神宗萬曆	一六	必勝艦隊の戦役
一六〇〇	二二六〇	後陽成天皇慶長	六	明神宗萬曆	二八	英國東印度商社成る
一六〇二	二二六二	彼陽成天皇慶長	八	明神宗萬曆	三〇	和蘭東印度商社成る
一六一四	二二七四	後水尾天皇慶長	一九	明神宗萬曆	四二	佛國國會を廢止す
一六一八	二二七八	後水尾天皇元和	四	明神宗萬曆	四六	三十年戦争起る
一六二九	二二八九	後水尾天皇寛永	六	明熹宗崇禎	二	丁抹獨逸と和す。英國國會を廢止す
一六四八	二三〇八	後光明天皇慶安	元	明永明王永曆	二	うえすとふありあ條約
一六四九	二三〇九	後光明天皇慶安	二	明永明王永曆	三	英國第一革命
一六五〇	二三一〇	後光明天皇慶安	三	明永明王永曆	四	ハバロフ雅克薩を取る
一六五一	二三一一	後光明天皇慶安	四	明永明王永曆	五	露國あるはじんに破く 英國航海條例を發布す
一六六〇	二三二〇	後西院天皇萬治	三	明永明王永曆	一四	英國王政復古
一六六一	二三二一	後西院天皇寛文	元	明永明王永曆	一五	佛王ルイス十四世親政

西洋史大事年表

五

一六八八	二三四八	東山天皇元祿	元	清聖祖康熙	二七	英國革命成る
一六八九	二三四九	東山天皇元祿	二	清聖祖康熙	二八	尼布楚條約成る
一七〇一	二三六一	東山天皇元祿	一四	清聖祖康熙	四〇	西班牙王位相續亂起る 北陸戦争起る
一七一一	二三七三	中御門天皇正徳	三	清聖祖康熙	五二	ゆとれひと條約成る
一七二一	二三八一	中御門天皇享保	六	清聖祖康熙	六〇	にすたつと條約成る
一七二七	二三八七	中御門天皇享保	一二	清世宗雍正	五	露國恰克圖を開く
一七四〇	二四〇〇	櫻町天皇元文	五	清高宗乾隆	五	フレデリキ大正即位 露國相續亂起る
一七四八	二四〇八	櫻町天皇寛延	元	清高宗乾隆	一三	あーへん條約成る
一七五六	二四一六	桃園天皇寶曆	六	清高宗乾隆	二一	七年戦争起る
一七五七	二四一七	桃園天皇寶曆	七	清高宗乾隆	二二	ぶらっしーの戦
一七六三	二四二三	後櫻町天皇寶曆	一三	清高宗乾隆	二八	ぼりー條約成る
一七七二	二四三二	後桃園天皇安永	元	清高宗乾隆	三七	ぼーらんと第一分割
一七七六	二四三六	後桃園天皇安永	五	清高宗乾隆	四一	在米國英領植民地獨立を唱ふ
一七八三	二四四三	光格天皇天明	三	清高宗乾隆	四八	ぼりー及びべるさいゆ條約 米國の獨立
一七八七	二四四七	光格天皇天明	七	清高宗乾隆	五二	合衆國憲法成る

西洋史大事年表

一七八九	二四四九	光格天皇寛政	元	五四	佛國革命起る
一七九二	二四五二	光格天皇寛政	四	五七	佛國共和制度となる
一七九三	二四五三	光格天皇寛政	五	五八	ルイス十六世續せらる
一七九五	二四五五	光格天皇寛政	七	六〇	佛國理事政府成る
一七九七	二四五七	光格天皇寛政	九	二	ナポレオン伊太利半島を征す
一八〇四	二四六四	光格天皇文化	元	九	ナポレオン帝位につく
一八〇五	二四六五	光格天皇文化	二	一〇	とらふあるがるの海戦
一八〇六	二四六六	光格天皇文化	三	一一	ありするりつの戦 神聖羅馬帝國に上
一八〇七	二四六七	光格天皇文化	四	一二	ナポレオンべるりん宣言を發す
一八一二	二四七二	光格天皇文化	九	一七	ナポレオン露國征討
一八一四	二四七四	光格天皇文化	一一	一九	ナポレオンをるばに流るる ういしん食談
一八一五	二四七五	光格天皇文化	一五	二〇	わいてるろいの戦
一八二七	二四八七	仁孝天皇文政	一〇	七	なほりの海戦
一八二九	二四八九	仁孝天皇文政	一二	九	あどりあのおる條約 汽車の創設
一八三〇	二四九〇	仁孝天皇天保	元	一〇	七月革命

西洋史大事年表

一八三三	二四九三	仁孝天皇天保	四	一三	電信の創設
一八四二	二五〇二	仁孝天皇天保	一三	二二	南京條約成る
一八四八	二五〇八	孝明天皇嘉永	元	二九	二月革命成る
一八五〇	二五一〇	孝明天皇嘉永	三	三〇	海底電線の創設
一八五一	二五一二	孝明天皇嘉永	四	元	ナポレオン佛國の憲法を改革す
一八五二	二五二二	孝明天皇安政	五	二	ナポレオン佛帝の位につく
一八五四	二五二四	孝明天皇安政	元	四	くりむ戦争起る
一八五五	二五二五	孝明天皇安政	二	五	せはすとほるの陥落
一八五六	二五二六	孝明天皇安政	三	六	ぱり一條約
一八五八	二五二八	孝明天皇安政	五	八	愛理條約
一八五九	二五二九	孝明天皇安政	六	九	そるふえりの戦
一八六〇	二五三〇	孝明天皇萬延	元	一〇	北京條約
一八六一	二五三一	孝明天皇文久	元	一一	米國南北戦争起る
一八六二	二五三二	孝明天皇文久	二	二九	ウイレルム一世普王となる
一八六三	二五三三	孝明天皇文久	三	二	佛國交趾支那を取る
					米國奴隸を解放す

索引

ア あーへん 一四 あーへん條約 七九 愛瑛 一〇五 あうすてりつつの戦 六九 アウダスツス 九 あうどすぶろく嶺和 三一 アウダステンアルダ公 九〇 アウレリウスアントニウ 一〇	アダム・スミス 六五 あつしりあ 二、三 あてね 四、五、六、七、九 あどりあのある條約 七九 あふがにすたん 一〇三 亞米利加發見 二五 あめりかの獨立 五五 亞米利加合衆國 五七 あめりか聯邦 一〇二 アリストテレス 六 あるぼじん 四四 アレキサンデル一世 七七 アレクサンドル大王 七	あれくさんどりあ 八 アングル 一六	イ イエスキリスト 一一 英吉利 建國一六、憲法一六、一七、百年戰二八、エリザベタ三三、三四、殖民三七、四〇、墮國和續四九、七年戰五〇、殖民五一、殖民地獨立五五、五七、文明五八、立憲自由六一、六二、佛國革命六七、七三、七五、七六、殖民地獨立七八、希臘七九、くりむ八四、露土戰爭九六、中立九七、殖民一〇三、一一、文明一一三、一一四 イサベラ 二五 イサベラ 九四 西班牙 新世界二六、フィリピン 二、三、和蘭三三、英と爭三四、殖民三七、王位和續四一、四三、對ナポレオン六六、殖民獨立七八、内亂九二、米西戰爭一一二 西班牙王位相續問題 四一 イスラエル 二 イスラム教 一三、一四 伊太利 六八一八六、八八、九一、九二
---	---	----------------------------------	---

伊太利統一	八八	越南	一〇〇	オランジッ公、ウィルレム	二八、二九
イバン四世	七四	エビスコバル教	三四	カロー五世(獨)	四三、四八
伊犁	一〇四	エリザベタ	三三、三四	カロー六世(獨)	四九
印紙條例	五三	えるさず	九三	カロー七世(獨)	六二
ウ	一〇五	えるば	七五	カロー一世英	六一
うらちほすく	一〇五	オ	活版	カロー二世英	六〇
エ	六五	埃地利 埃國相續四八、七年戰	カタリナ二世	カロー十世(佛)	八〇
英國革命	一一一	五〇一五二、ぼーちんど五三	カタリナ二世	カロー十二世(典)	四六
英佛協約	六	佛國革命六六、六八、六九、	カタルナ十二世	カロー大帝	一四
エウクリデス	一六	七二、七五、クリム八四、特	カナル	カローマルテル	一四
エケベルト	一六	埃九〇、九一	かなた	カント	一一三
えじふと	一、二、六八、	埃國相續問題	上かりふおるにあ	ガウス	一二五
七九、一〇八	和蘭	三三、三七、五七	かるたご	キ	二五
			かるであ	きうば	
			カルビン		

汽車	一一四	クツク	一〇九	ゲ	二六
汽船	一一四	くねるすどるふ	五〇	ゲート	五九
北獨逸聯邦	九一	クライフ	五一	コ	九八
きほ	一〇三	くりむ	五三、八四	さばや	八八
きふろす	九七	くれて	一〇〇	さうけん	一三一、一五
キリスチアン九世	九〇	グ		三國同盟	九八
キリスト教起	一一	グランド	一〇二	三十年戰	三五、三六
金字塔	一	グレゴリオ七世	一八	さるちにあ	八四、八六、八八
義騎	一八	ケ		さんすてふあの	九六
ギゾ	八一	ケーサル	九、一〇	シ	
希臘	四、五、六	ケフレル	五九	しうれすうひ	九〇
希臘	七九、九九、一〇〇				

シエクスピア	五九	ジオアン	一六	セ	赤十字社	一一八	ダーウィン	一二四
七月革命	八〇	ジオアンクーテンベルグ	二二	せぼすとぼる	八四	嘘囃囃	一〇五	
七月勅令	八〇	ジオアンタルク	二二	せるびあ	九五、九七	ち		
しちりあ	八八	ジオアン六世	七七	せんとへれな	七六	ちうにす	九八	
七年戦争	四九	ジオルジ三世	五五			ちうーりひ條約	八七	
神聖同盟	七九	自由平等	六四、六五			チエール	七一、七三、八〇、八一	
神聖ローマ皇帝	一五	じぶらるたる	四二			中立同盟	五七	
シルレル	五九	常備軍	二二、二三	ソ	ソクラテス	六	チルシット	七一
しれしあ	四九			タ	そるふえりの	八七	チウーフレース	四七
ジ		ス		ダ			ツ	
十字軍	一九	スチファンソン	一一二				ツイングリ	二八
ジェームス一世	六二	すばいえる	二九					
ジェームス二世	六二	すばるた	四					
じりねーぶ	三〇	スペンサー	一二三					

テ

一〇〇

デ

デカルト

五八

電車

一一五

ト

東印度商社

三八

東方地方

二二〇

とらふるがる

七〇

土耳古

二三、二四、

とるきすたん

一〇三

とれんと會議

三〇

ド

獨逸 起一五、ヘンリ四世一八

十字軍一九、宗教改革一七一

三一、三十年戦争三五―三六、

西王位相續四一―四三、奥國

相續四八―四九、七年戦争五

〇―五一、文明五八、佛國革

命六五、七六

獨逸 八九―九四、九六一

九八、一二二

ドレーク

三八

奴隸問題

一〇一

ナイチンゲール

八五

な餘りのの戦

七九

なぼり

八八

ナポレオン

六七一七六

ナポレオン三世

八二、八三、八五、九一―九三

南京條約

一〇五

ニ

ニウートン

五八

にうーじーらんど

一〇九

にうーよるく

五六

にうーふさうんどらんど

四三

二月革命

八一

二國聯合

九八

ニコライ一世

七九

日英同盟

一〇七

日清戦争

一〇六

日本海々戦

一〇七

日露戦争

一〇七

ネ

ねーでるらんど

六八

尼布楚

四五

ネルソン

六八、七〇

ノ

諾威

一〇一

ハ

ハーベ

五九

ハバロフ

四四

はわい

一二二

はんのふえる

五〇

馬關條約	一〇八	富國策	六五
バスコタガマ	二四	復活式	二二
ぼすちゆ	六六	佛國革命	六五
ぼたびあ	三八	普佛戦争	九二、九三
ぼびろあ	三	ふべるつすぶるぐ	五二
ぼびろん	七	ふらんく	一四、一五
ぼるま	一〇四	フランクリン	五六、五九
バルトロメオチアス	二四	フランシス一世(佛)	二八
パ		フランシス一世(英)	七〇
ぼなま	一一二	フランシスヨセフ	八七
ぼみしる	一〇三、一〇四	佛蘭西 起二六、法王三〇、	
ぼりー會議	七六	百年戦争二二、フランシス一	
ぼりー條約	五一、五七、八四、一一二	世二八、ヘンリ二世三一、三	
		十年戦争三六、植民四〇、ル	
		イス十四世四一、ルイス十四	
		世の代六五、西王位相續四一、	
		四二、英蘭相續四八、七年戦	

年四九一五二、米蘭獨立五六、		へぶらい	二
文學六四、革命六五、七六、		へるぜとひな	九五、九七
希臘七九、七月革命八〇、		ヘロドトス	二八
二九革命八一、ナポレオン八		ヘンリ三世	一七
二、八三、くりむの殿八四、		ヘンリ四世	一八
八五、八六、伊國統一、八七		ヘンリ八世	三二
八八、獨の一統九〇、九一、		ヘンリチウナン	八五
普佛戦争九二、九四、二國聯			
合九八、植民一〇八、一一〇			
一一一			
フレデリキウィルレム三	七一	ベ	
世		ベークン	五八
フレデリキ大王	四七、	米西戦争	一一二
四八、五〇、五一		べねずえら	七八
フルトン	一一四	べるさいゆ條約	五七
ふろりた	一〇一	べるりん	九四
ブ			
武装中立同盟	六九	ヘーゲル	一一三
		平和會議	一一八
		へ	
		ぶんじやふ	一〇三
		普魯西 起四七、英蘭相續四	
		八一五〇、七年戦争五〇、一五	
		二、ばーらんと五三、五四、	
		ナポレオン一世七二、七六、	
		くりむの殿八四、獨逸の一統	
		八九、九四	
		プ	
		ぶらじる	二八、七二、七八
		ぶるかりあ	九五、九六
		ぶらーど	九一
		ぶらっしー	五一
		普魯西 起四七、英蘭相續四	
		八一五〇、七年戦争五〇、一五	
		二、ばーらんと五三、五四、	
		ナポレオン一世七二、七六、	
		くりむの殿八四、獨逸の一統	
		八九、九四	
		フ	
		フイリホ二世(西)	三二、
		フイリホ二世(佛)	二〇
		フイリホ五世(西)	二四
		ふいらてるふいあ	五六、
		ふいりつびん	二六、三九
		フーゴ	一六
		ふえだきあ	一、二
		フエルヂナンド	七八
		ペ	
		北京條約	一〇五
		ペテロ	七八
		ペテロ三世	五一
		ペテロ大帝	四四
		ペリクレス	五
		ヘルシア	四、五、七
		ホ	
		封建制度	二三
		奉天の戦	一〇七
		北方戦争	四六
		ほるこーす	一〇四

ほるすたいん	九〇	ほるとがる	二四一、二五、 三六	ミカエルアンゼロ	二二	モ	蒙古	二〇
ほんがりあ	四九	マ		南米利加共和国	一〇九	もすくほ	七四	
ボ		マイエル	一二四	みのるか	四三	もろつこ	一一一	
除すにあ	九五、九七	マガリアエンス	二六	ミルトン	五九	モルトケ	九一	
ボルテール	六四	まゆどにあ	六、七、九	ム		モンテスキュー	六四	
ぼるねお	一〇九	マクマホン	八四、九四	ムハメッド	一三	もんでねごろー	九五	
ボ		まじらす	四九	ム		モンロー	七九	
ぼーつます條約	一〇八	マリヤ	五八、六二、六三	メ		イ		
ぼーらんど分割	五三	マリヤテレサ	四八	メートル法	六九	イエスイタ社	三〇、三一	
五四		マリアルイサ	二七	めきしこ	七八、八六、一〇一	ユ		
ぼつだむ	五二	まるせーゆ	六六	めつか	一三			
ボリニアツク	八〇	満洲鐵道	一〇六	メッテルニヒ	七七、七九	ユスチニアヌス	一一	
ぼるとりこ	一一二	ミ		めつつ	九三			

ゆたや	二、三	リシウリウー	六三	るくせんぶるど	九二	わーえろー	七六
ゆとれひと條約	四三	リビンググストン	一〇八	ルリク	一七	王權神聖	六一
ラ		旅順口	一〇六	レ		ワット	六五
らいふちひの戰	七五	リンカーン	一〇二	レオポルド	九二	わるしあわ	七一
ラテン文字	一〇	リンネ	五九	レッシング	五九	ワイ	
ラファエロ	二二	るいじあな	五一	ロ		ウイ	
ラポアシェール	五九	ルイザ	七一	羅馬	八一、二	ウイルレム一世	八九、九六
ラムブルヒト	六〇	ルイス十四世	四一、五九	羅馬法王	一七、一八、一八	ウイルレム三世	六一
ランケ	一一三	ルイス十六世	六六、六七	ローリ	三三、三九		
リ		ルイス十八世	七五、八〇	露西亞	起一七、ペテロ大帝 四四一四六七七年戰爭五〇、カ タリナ二世五三、ぼーらんど 分割五四、中立同盟五七、佛 國革命六九、七一、七四一七 六、神聖同盟七七、七九、		
理事政府	六七	ルイスファイルボ	八〇、八一				
リツちもんど	一〇一	ルーソー	六四				
		ルーテル	二八				

1230.423-26A

索引終

ういーん ういーん會議 威海衛 ウエ うえすとふありあ 七五 三六	ウエリントン ウオ ウオシントン うおるむす 七六 五八 五六 二八
---	---

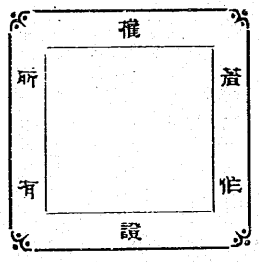
明治四十四年十二月八日印
明治四十四年十二月十二日發行
明治四十五年三月十日再版印刷
明治四十五年三月十三日再版發行

新編女子西洋史
定價金四拾八錢

著者 小川銀次郎

發行兼印刷者 東京市日本橋區鐵砲町三番地
合資會社 六 盟 館

右代表者 杉本七百丸



發行所

東京市日本橋區鐵砲町三番地
合資會社 六 盟 館
(電話特選浪花二七六四番)
(振替口座東京二二五五〇番)



